

平成二十五年原子力規制委員会規則第六号

実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則

核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律（昭和三十三年法律第六十六号）第四十三條の三の十四第一項の規定に基づき、実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則を次のように定める。

目次
第一章 総則（第一条―第三条の二）
第二章 設計基準対象施設（第四条―第四十八条）
第三章 重大事故等対処施設（第四十九条―第七十八条）
第四章 雑則（第七十九条）

第一章 総則

第一条 この規則は、実用発電用原子炉及びその附属施設について適用する。

第二条 この規則において使用する用語は、核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律（以下「法」という。）において使用する用語の例による。

2 この規則において、次に掲げる用語の意義は、それぞれ当該各号に定めるところによる。
一 「放射線」とは、実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則（昭和五十三年通商産業省令第七十七号。以下「実用炉規則」という。）第二条第二項第一号に規定する放射線をいう。
二 「通常運転」とは、実用発電用原子炉及びその附属施設的位置、構造及び設備の基準に関する規則（平成二十五年原子力規制委員会規則第五号。以下「設置許可基準規則」という。）第二条第二項第二号に規定する通常運転をいう。

三 「運転時の異常な過渡変化」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三号に規定する運転時の異常な過渡変化をいう。
四 「設計基準事故」とは、設置許可基準規則第二条第二項第四号に規定する設計基準事故をいう。

五 「設計基準対象施設」とは、設置許可基準規則第二条第七号に規定する設計基準対象施設をいう。

六 「工学的安全施設」とは、設置許可基準規則第二条第十号に規定する工学的安全施設をいう。
七 「重大事故等対処施設」とは、設置許可基準規則第二条第二項第十一号に規定する重大事故等対処施設をいう。

八 「特定重大事故等対処施設」とは、設置許可基準規則第二条第二項第十二号に規定する特定重大事故等対処施設をいう。
九 「安全設備」とは、設計基準事故時及び設計基準事故に至るまでの間に想定される環境条件において、その損壊又は故障その他の異常により公衆に放射線障害を及ぼすおそれを直接又は間接に生じさせる設備であつて次に掲げるものをいう。

イ 一次冷却系統に係る設備及びその附属設備
ロ 反応度制御系統（設置許可基準規則第二条第二項第二十七号に規定する反応度制御系統をいう。以下同じ。）に係る設備及びそれらの附属設備
ハ 安全保護装置（運転時の異常な過渡変化が発生する場合、地震の発生により発電用原子炉の運転に支障が生ずる場合及び一次冷却材喪失その他の設計基準事故時に原子炉停止系統を自動的に作動させ、かつ、発電用原子炉内の燃料体の破損又は発電用原子炉の炉心（以下単に「炉心」という。）の損傷による多量の放射性物質の放出のおそれがある場合に、工学的安全施設を自動的に作動させる装置をいう。以下同じ。）

非常用炉心冷却設備（原子炉圧力容器内において発生した熱を通常運転時において除去する発電用原子炉施設が設計基準事故時及び設計基準事故に至るまでの間にその機能を失った場合に原子炉圧力容器内において発生した熱を除去する設備をいう。以下同じ。）その他非常時に発電用原子炉の安全性を確保するために必要な設備及びそれらの附属設備

ニ 原子炉格納容器及びその隔離弁
ホ 非常用電源設備及びその附属設備

十 「設計基準事故対処設備」とは、設置許可基準規則第二条第二項第十三号に規定する設計基準事故対処設備をいう。
十一 「重大事故等対処設備」とは、設置許可基準規則第二条第二項第十四号に規定する重大事故等対処設備をいう。

十二 「重大事故防止設備」とは、設置許可基準規則第二条第十五号に規定する重大事故防止設備をいう。
十三 「重大事故緩和設備」とは、設置許可基準規則第二条第二項第十六号に規定する重大事故緩和設備をいう。
十四 「管理区域」とは、実用炉規則第二条第二項第四号に規定する管理区域をいう。
十五 「周辺監視区域」とは、実用炉規則第二条第二項第六号に規定する周辺監視区域をいう。

十六 「燃料材」とは、設置許可基準規則第二条第二項第二十二号に規定する燃料材をいう。
十七 「燃料被覆材」とは、設置許可基準規則第二条第二項第二十三号に規定する燃料被覆材をいう。
十八 「燃料要素」とは、設置許可基準規則第二条第二項第二十四号に規定する燃料要素をいう。
十九 「燃料要素の許容損傷限界」とは、設置許可基準規則第二条第二項第二十五号に規定する燃料要素の許容損傷限界をいう。
二十 「反応度値」とは、設置許可基準規則第二条第二項第二十八号に規定する反応度値をいう。

二十一 「制御棒の最大反応度値」とは、設置許可基準規則第二条第二項第二十九号に規定する制御棒の最大反応度値をいう。
二十二 「反応度添加率」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三十号に規定する反応度添加率をいう。

二十三 「一次冷却材」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三十一号に規定する一次冷却材をいう。
二十四 「二次冷却材」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三十二号に規定する二次冷却材をいう。

二十五 「一次冷却系統」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三十三号に規定する一次冷却系統をいう。
二十六 「最終ヒートシンク」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三十四号に規定する最終ヒートシンクをいう。

二十七 「原子炉冷却材圧力バウンダリ」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三十五号に規定する原子炉冷却材圧力バウンダリをいう。

二十八 「原子炉格納容器」とは、設置許可基準規則第二条第二項第三十六号に規定する原子炉格納容器をいう。
二十九 「コンクリート製原子炉格納容器」とは、原子炉格納容器であつて、鋼板で内張りされたコンクリート部を有するものをいう。

三十 「コンクリート部」とは、コンクリート製原子炉格納容器のうち鉄筋コンクリート構造又はプレストレストコンクリート構造の部分をいう。
三十一 「鋼製内張り部等」とは、コンクリート製原子炉格納容器内の機械又は器具から放出される放射性物質の漏えいを防止するためにコンクリート部に内張りされている鋼板（以下「ライナプレート」という。）、胴と底部のライナプレートを接続する鋼板（以下「ナツクル」という。）、貫通部スリーブ及びコンクリート部への定着金具をいう。

三十二 「クラス1容器」、「クラス1管」、「クラス1ポンプ」又は「クラス1弁」とは、それぞれ原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する容器、管、ポンプ又は弁をいう。
三十三 「クラス2容器」、「クラス2管」、「クラス2ポンプ」又は「クラス2弁」とは、それぞれ次に掲げる機器（設計基準対象施設に属するものに限る。）に該当する容器、管、ポンプ又は弁をいう。

イ 設計基準事故時及び設計基準事故に至るまでの間に想定される環境条件において、発電用原子炉を安全に停止するため又は発電用原子炉施設の安全を確保するために必要な設備であつて、その損壊又は故障その他の異常により公衆に放射線障害を及ぼすおそれを間接に生じさせるものに属する機器（放射線管理施設又は原子炉格納施設（非常用ガス処理設備に限る。）に属するダクトにあつては、原子炉格納容器の貫通部から外側隔離弁までの部分に限る。）

ロ 蒸気タービンを駆動させることを主たる目的とする流体（蒸気及び給水をいう。）が循環する回路に係る設備に属する機器であつて、クラス1機器（クラス1容器、クラス1管、クラス1ポンプ又はクラス1弁をいう。以下同じ。）の下流側に位置する蒸気系統のうちクラス1機器からこれに最も近い止め弁までのもの及びクラス1機器の上流側に位置する給水系統のうちクラス

1の機器をいう。

1 機器からこれに最も近い止め弁までの
ハ イ及びロに掲げる機器以外の機器であつ
て、原子炉格納容器の真通部から内側隔離
弁又は外側隔離弁までのもの

三十四 「クラス3容器」又は「クラス3管」
とは、それぞれクラス1機器、クラス2機器
(クラス2容器、クラス2管、クラス2ポン
プ又はクラス2弁をいう。以下同じ)、原子
炉格納容器及び放射線管理施設若しくは原子
炉格納施設(非常用ガス処理設備に限る。)
に属するダクト以外の設計基準対象施設に属
する容器又は管(内包する流体の放射性物質
の濃度が三十七ミリベクレル毎立方センチメ
ートル(流体が液体の場合にあつては、三十
七キロベクレル毎立方センチメートル)以上
の管又は最高使用圧力が零メガパスカルを超
える管に限る。)をいう。

三十五 「クラス4管」とは、放射線管理施設
又は原子炉格納施設(非常用ガス処理設備に
限る。)に属するダクトであつて、内包する
流体の放射性物質の濃度が三十七ミリベクレ
ル毎立方センチメートル以上のもの(クラス
2管に属する部分を除く。)をいう。

三十六 「クラス1支持構造物」、「クラス2支
持構造物」又は「原子炉格納容器支持構造
物」とは、それぞれクラス1機器、クラス2
機器又は原子炉格納容器を支持する構造物を
いう。

三十七 「重大事故等クラス1容器」、「重大事
故等クラス1管」、「重大事故等クラス1ポン
プ」又は「重大事故等クラス1弁」とは、そ
れぞれ重大事故等対処設備に属する容器、
管、ポンプ又は弁(特定重大事故等対処施設
に属するものに限る。)をいう。

三十八 「重大事故等クラス2容器」、「重大事
故等クラス2管」、「重大事故等クラス2ポン
プ」又は「重大事故等クラス2弁」とは、そ
れぞれ重大事故等対処設備のうち常設のもの
(重大事故等対処設備のうち可搬型のもの
(以下「可搬型重大事故等対処設備」とい
う。))と接続するものにあつては、当該可搬型
重大事故等対処設備と接続するために必要な
発電用原子炉施設内の常設の配管、弁、ケー
ブルその他の機器を含む。以下「常設重大事
故等対処設備」という。)に属する容器、管、
ポンプ又は弁(特定重大事故等対処施設に属
するものを除く。)をいう。

三十九 「重大事故等クラス3容器」、「重大事
故等クラス3管」、「重大事故等クラス3ポン
プ」又は「重大事故等クラス3弁」とは、そ
れぞれ可搬型重大事故等対処設備に属する容
器、管、ポンプ又は弁をいう。

四十 「重大事故等クラス1支持構造物」とは、
重大事故等クラス1機器(重大事故等クラス
1容器、重大事故等クラス1管、重大事故等
クラス1ポンプ又は重大事故等クラス1弁を
いう。以下同じ。)を支持する構造物をいう。

四十一 「重大事故等クラス2支持構造物」と
は、重大事故等クラス2機器(重大事故等ク
ラス2容器、重大事故等クラス2管、重大事
故等クラス2ポンプ又は重大事故等クラス2
弁をいう。以下同じ。)を支持する構造物を
いう。

四十二 「最高使用圧力」とは、設置許可基準
規則第二条第二項第三十八号に規定する最高
使用圧力をいう。

四十三 「最高使用温度」とは、設置許可基準
規則第二条第二項第三十九号に規定する最高
使用温度をいう。

四十四 「最低使用温度」とは、対象とする機
器、支持構造物又は炉心支持構造物がその主
たる機能を果たすべき運転状態又は試験状態
において生ずる最低の温度以下の温度であつ
て、設計上定めるものをいう。

四十五 「運転状態I」とは、発電用原子炉施
設の通常運転時の状態をいう。

四十六 「運転状態II」とは、設計基準事故
時及び設計基準事故に至るまでの間に想定さ
れる環境条件において、運転状態I、運転状
態III、運転状態IV及び試験状態以外の
状態をいう。

四十七 「運転状態III」とは、設計基準事
故時及び設計基準事故に至るまでの間に想定
される環境条件において、発電用原子炉施設
の故障、誤作動その他の異常により発電用原
子炉の運転の停止が緊急に必要とされる状態
をいう。

四十八 「運転状態IV」とは、設計基準事故
時及び設計基準事故に至るまでの間に想定さ
れる環境条件において、発電用原子炉施設の
安全設計上想定される異常な事態が生じてい
る状態をいう。

四十九 「機械的荷重」とは、自重、管又は支
持構造物からの反力その他附加荷重のうち地
震荷重を除くものであつて、設計上定めるも
のをいう。

五十 「荷重状態I」とは、コンクリート製原
子炉格納容器が運転状態I(積雪時及び暴風
時を除く。)において想定される荷重を受け
る状態をいう。

五十一 「荷重状態II」とは、コンクリート
製原子炉格納容器が次に掲げるいずれかの状
態において想定される荷重を受ける状態をい
う。
イ 逃がし安全弁作動時の状態(積雪時及び
暴風時を除く。)
ロ 原子炉格納容器耐圧試験時の状態(積雪
時及び暴風時を除く。)
ハ 運転状態Iにおける積雪時の状態(暴風
時を除く。)

五十二 「荷重状態III」とは、コンクリー
ト製原子炉格納容器が運転状態Iにおける暴
風時の状態又は運転状態IVにおける荷重状
態IV以外の状態をいう。

五十三 「荷重状態IV」とは、コンクリート
製原子炉格納容器が運転状態IV(積雪時又
は暴風時を含む。)において原子炉格納容器
は安全上想定される異常な事態が生じている
状態をいう。

五十四 「試験状態」とは、耐圧試験により発
電用原子炉施設に最高使用圧力を超える圧力
が加えられている状態をいう。

五十五 「兼用キヤスク」とは、設置許可基準
規則第二条第二項第四十一号に規定する兼用
キヤスクをいう。
(特殊な設計による発電用原子炉施設)
第三条 特別の理由により原子力規制委員会の認
可を受けた場合は、この規則の規定による
可を受けた場合は、この規則の規定による
で発電用原子炉施設を施設することができる。
2 前項の認可を受けようとする者は、その理由
及び施設方法を記載した申請書に関係図面を添
付して申請しなければならない。
(廃止措置中の発電用原子炉施設の維持)
第三条の二 法第四十三条の三の三十四第二項の
認可を受けた場合には、当該認可に係る廃止措
置計画(同条第三項において準用する法第十二
条の六第三項又は第五項の規定による変更の認
可又は届出があつたときは、その変更後のも
の。以下この条において同じ。)で定める性能
維持施設(実用炉規則第十五条の二第二十一号
の性能維持施設をいう。)については、第二章

及び第三章の規定にかかわらず、当該認可に係
る廃止措置計画に定めるところにより、当該施
設を維持しなければならない。
第二章 設計基準対象施設
(設計基準対象施設の地盤)

第四条 設計基準対象施設は、設置許可基準規則
第三条第一項の地震力が作用した場合において
も当該設計基準対象施設を十分に支持すること
ができる地盤に施設しなければならない。た
だし、兼用キヤスクにあつては、地盤により十分
に支持されなくてもその安全機能が損なわれな
い方法により設けることができるときは、この
限りでない。
(地震による損傷の防止)

第五条 設計基準対象施設は、これに作用する地
震力(設置許可基準規則第四条第二項の規定に
より算定する地震力をいう。)による損傷によ
り公衆に放射線障害を及ぼさないように施設し
なければならない。
2 耐震重要施設(設置許可基準規則第三条第一
項に規定する耐震重要施設をいう。以下同じ。)
は、基準地震動による地震力(設置許可基準規
則第四条第三項に規定する基準地震動による地
震力)をい。以下同じ。)に対してその安全性
が損なわれるおそれがないように施設しなけれ
ばならない。

3 耐震重要施設が設置許可基準規則第四条第三
項の地震により生ずる斜面の崩壊によりその安
全性が損なわれるおそれがないよう、防護措置
その他の適切な措置を講じなければならない。
4 炉心内の燃料被覆材は、基準地震動による地
震力に対して放射性物質の閉じ込めの機能が損
なわれるおそれがないように施設しなければならない。

5 兼用キヤスクは、設置許可基準規則第四条第
六項に規定する地震力に対してその安全性が損
なわれるおそれがないように施設しなければならない。
6 兼用キヤスクが設置許可基準規則第四条第七
項の地震により生ずる斜面の崩壊によりその安
全性が損なわれるおそれがないよう、防護措置
その他の適切な措置を講じなければならない。
(津波による損傷の防止)

第六条 設計基準対象施設(兼用キヤスク及びそ
の周辺施設を除く。)が基準津波(設置許可基
準規則第五条第一項に規定する基準津波をい
う。以下同じ。)によりその安全性が損なわれ

るおそれがないよう、防護措置その他の適切な措置を講じなければならない。

2 兼用キヤスク及びその周辺施設が設置許可基準規則第五項第二項に規定する津波によりその安全性が損なわれるおそれがないよう、防護措置その他の適切な措置を講じなければならない。

第七條 設計基準対象施設（兼用キヤスクを除く。）が想定される自然現象（地震及び津波を除く。）によりその安全性を損なうおそれがある場合は、防護措置、基礎地盤の改良その他の適切な措置を講じなければならない。

2 周辺監視区域に隣接する地域に事業所、鉄道、道路その他の外部からの衝撃が発生するおそれがある場合には、事業所における火災又は爆発事故、危険物を搭載した車両、船舶又は航空機の事故その他の敷地及び敷地周辺の状況から想定される事象であつて人為によるもの（故意によるものを除く。以下「人為による事象」という。）により発電用原子炉施設（兼用キヤスクを除く。）の安全性が損なわれなければならない。防護措置その他の適切な措置を講じなければならない。

第九條 工場等には、発電用原子炉施設への人の不法な侵入、発電用原子炉施設に不正に爆発性又は可燃性を有する物件を他人に危害を与え、又は他の物件を損傷するおそれがある物件が持ち込まれること及び不正アクセス行為（不正アクセス行為の禁止等に関する法律（平成十一年法律第二百二十八号）第二条第四項に規定する不正アクセス行為をいう。第三十五条第五号において同じ。）を防止するため、適切な措置を講じなければならない。

3 工場等には、業務上立ち入る者以外の者がみだりに周辺監視区域内に立ち入ることを制限するため、柵、塀その他の人の侵入を防止するための設備を設けるか、又は周辺監視区域である旨を表示しなければならない。ただし、当該区域に人が立ち入るおそれがないことが明らかかな場合は、この限りでない。

第十條 急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律（昭和四十四年法律第五十七号）第三条第一項の規定により指定された急傾斜地崩壊危険区域内に施設する設備は、当該区域内の急傾斜地（同法第二条第一項に規定するものをいう。）の崩壊を助長し、又は誘発することがないように施設しなければならない。

第十一條 設計基準対象施設が火災によりその安全性が損なわれないう、次に掲げる措置を講じなければならない。

- 一 火災の発生を防止するため、次の措置を講ずること。
イ 発火性又は引火性の物質を内包する系統の漏えい防止その他の措置を講ずること。
ロ 安全施設（設置許可基準規則第二条第二項第八号に規定する安全施設をいう。以下同じ。）には、不燃性材料又は難燃性材料を使用すること。ただし、次に掲げる場合は、この限りでない。
(1) 安全施設に使用する材料が、不燃性材料又は難燃性材料と同等以上の性能を有するもの（以下「代替材料」という。）である場合

第十二條 設計基準対象施設が発電用原子炉施設内における溢水等の発生によりその安全性を損なうおそれがある場合は、防護措置その他の適切な措置を講じなければならない。

第十三條 発電用原子炉施設には、次に掲げる設備を施設しなければならない。

- 一 その位置を明確かつ恒久的に表示することにより容易に識別できる安全避難通路
二 照明用の電源が喪失した場合においても機能を損なわない避難用の照明
三 設計基準事故が発生した場合に用いる照明（前号の避難用の照明を除く。）及びその専用の電源
（安全設備）

第十四條 第二条第二項第九号及びホに掲げる安全設備は、当該安全設備を構成する機械又は器具の単一故障（設置許可基準規則第十二条第二項に規定する単一故障をいう。以下同じ。）が発生した場合であつて、外部電源が利用できない場合においても機能できるように、構成する機械又は器具の機能、構造及び動作原理を考慮して、多重性又は多様性を確保し、及び独立性を確保するよう、施設しなければならない。

第十五條 設計基準対象施設は、通常運転時において発電用原子炉の反応度を安全かつ安定的に制御でき、かつ、運転時の異常な過渡変化時においても発電用原子炉固有の出力抑制特性を有するとともに、発電用原子炉の反応度を制御することに核分裂の連鎖反応を制御できる能力を有するものでなければならない。

第十六條 設計基準対象施設は、その健全性及び能力を確認するため、発電用原子炉の運転中又は停止中に必要な箇所の保守点検（試験及び検査を含む。）ができるよう、施設しなければならない。

第十七條 設計基準対象施設は、通常運転時において容器、配管、ポンプ、弁その他の機械又は器具から放射性物質を含む流体が著しく漏えいする場合は、流体状態の放射性廃棄物を処理する設備によりこれを安全に処理するように施設しなければならない。

区域を明らかにするための設備を設けるか、又は安全区域である旨を表示しなければならない。
3 工場等には、業務上立ち入る者以外の者がみだりに周辺監視区域内に立ち入ることを制限するため、柵、塀その他の人の侵入を防止するための設備を設けるか、又は周辺監視区域である旨を表示しなければならない。ただし、当該区域に人が立ち入るおそれがないことが明らかかな場合は、この限りでない。

第九條 工場等には、発電用原子炉施設への人の不法な侵入、発電用原子炉施設に不正に爆発性又は可燃性を有する物件を他人に危害を与え、又は他の物件を損傷するおそれがある物件が持ち込まれること及び不正アクセス行為（不正アクセス行為の禁止等に関する法律（平成十一年法律第二百二十八号）第二条第四項に規定する不正アクセス行為をいう。第三十五条第五号において同じ。）を防止するため、適切な措置を講じなければならない。

第十條 急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律（昭和四十四年法律第五十七号）第三条第一項の規定により指定された急傾斜地崩壊危険区域内に施設する設備は、当該区域内の急傾斜地（同法第二条第一項に規定するものをいう。）の崩壊を助長し、又は誘発することがないように施設しなければならない。

第十一條 設計基準対象施設が火災によりその安全性が損なわれないう、次に掲げる措置を講じなければならない。
一 火災の発生を防止するため、次の措置を講ずること。
イ 発火性又は引火性の物質を内包する系統の漏えい防止その他の措置を講ずること。
ロ 安全施設（設置許可基準規則第二条第二項第八号に規定する安全施設をいう。以下同じ。）には、不燃性材料又は難燃性材料を使用すること。ただし、次に掲げる場合は、この限りでない。
(1) 安全施設に使用する材料が、不燃性材料又は難燃性材料と同等以上の性能を有するもの（以下「代替材料」という。）である場合

(2) 安全施設の機能を確保するために必要な代替材料の使用が技術上困難な場合であつて、安全施設における火災に起因して他の安全施設において火災が発生することを防止するための措置が講じられていない場合
ハ 避雷設備その他の自然現象による火災発生を防止するための設備を施設すること。
ニ 水素の供給設備その他の水素が内部に存在する可能性がある設備にあつては、水素の燃焼が起きた場合においても発電用原子炉施設の安全性を損なわないよう施設すること。

ホ 放射線分解により発生し、蓄積した水素の急速な燃焼によつて、発電用原子炉施設の安全性を損なうおそれがある場合には、水素の蓄積を防止する措置を講ずること。
二 火災の感知及び消火のため、次に掲げるところにより、早期に火災発生を感知する設備（以下「火災感知設備」という。）及び早期に消火を行う設備（以下「消火設備」という。）を施設すること。
イ 火災と同時に発生すると想定される自然現象により、その機能が損なわれることがないこと。

ロ 消火設備にあつては、その損壊、誤作動又は誤操作が起きた場合においても発電用原子炉施設の安全性が損なわれないこと。
三 火災の影響を軽減するため、耐火性能を有する壁の設置その他の延焼を防止するための措置その他の発電用原子炉施設の火災により発電用原子炉を停止する機能が損なわれないこと。

第十二條 設計基準対象施設が発電用原子炉施設内における溢水等の発生によりその安全性を損なうおそれがある場合は、防護措置その他の適切な措置を講じなければならない。
2 設計基準対象施設が発電用原子炉施設内の放射性物質を含む液体を内包する容器、配管その他の設備から放射性物質を含む液体があふれ出しておそれがある場合は、当該液体が管理区域外へ漏えいすることを防止するために必要な措置を講じなければならない。

(安全避難通路等)
第十三條 発電用原子炉施設には、次に掲げる設備を施設しなければならない。
一 その位置を明確かつ恒久的に表示することにより容易に識別できる安全避難通路
二 照明用の電源が喪失した場合においても機能を損なわない避難用の照明
三 設計基準事故が発生した場合に用いる照明（前号の避難用の照明を除く。）及びその専用の電源
（安全設備）

第十四條 第二条第二項第九号及びホに掲げる安全設備は、当該安全設備を構成する機械又は器具の単一故障（設置許可基準規則第十二条第二項に規定する単一故障をいう。以下同じ。）が発生した場合であつて、外部電源が利用できない場合においても機能できるように、構成する機械又は器具の機能、構造及び動作原理を考慮して、多重性又は多様性を確保し、及び独立性を確保するよう、施設しなければならない。

第十五條 設計基準対象施設は、通常運転時において発電用原子炉の反応度を安全かつ安定的に制御でき、かつ、運転時の異常な過渡変化時においても発電用原子炉固有の出力抑制特性を有するとともに、発電用原子炉の反応度を制御することに核分裂の連鎖反応を制御できる能力を有するものでなければならない。

第十六條 設計基準対象施設は、その健全性及び能力を確認するため、発電用原子炉の運転中又は停止中に必要な箇所の保守点検（試験及び検査を含む。）ができるよう、施設しなければならない。
第十七條 設計基準対象施設は、通常運転時において容器、配管、ポンプ、弁その他の機械又は器具から放射性物質を含む流体が著しく漏えいする場合は、流体状態の放射性廃棄物を処理する設備によりこれを安全に処理するように施設しなければならない。

第十八條 設計基準対象施設に属する設備であつて、蒸気タービン、ポンプその他の機器又は配管の損壊に伴う飛散物により損傷を受け、発電用原子炉施設の安全性を損なうことが想定されるもの

には、防護施設の設置その他の損傷防止措置を講じなければならない。

5 設計基準対象施設に属する安全設備であつて、第二条第二項第九号ハに掲げるものは、二以上の発電用原子炉施設において共用し、又は相互に接続するものであつてはならない。ただし、二以上の発電用原子炉施設と共用し、又は相互に接続することによって当該二以上の発電用原子炉施設の安全性が向上する場合は、この限りでない。

6 前項の安全設備以外の安全設備を二以上の発電用原子炉施設と共用し、又は相互に接続する場合によっては、発電用原子炉施設の安全性を損なわなければならない。施設しなければならない。

第十六条 発電用原子炉施設には、全交流動力電源喪失時から重大事故等（重大事故に至るおそれがある事故（運転時の異常な過渡変化及び設計基準事故を除く。以下同じ。）又は重大事故をいう。以下同じ。）に対処するために必要な電力の供給が交流動力電源設備から開始されるまでの間、発電用原子炉を安全に停止し、かつ、発電用原子炉の停止後に炉心を冷却するための設備が動作するとともに、原子炉格納容器的健全性を確保するための設備が動作することができるよう、これらの設備の動作に必要な容量を有する蓄電池その他の設計基準事故に対処するための電源設備を施設しなければならない。

第十七条 設計基準対象施設（圧縮機、補助ボイラー、蒸気タービン（発電用のものに限る。）発電機、変圧器及び遮断器を除く。）に属する容器、管、ポンプ若しくは弁若しくはこれらの支持構造物又は炉心支持構造物の材料及び構造は、次に定めるところによらなければならない。この場合において、第一号から第七号まで及び第十五号の規定については、法第四十三条の三の十一第二項に定める使用前事業者検査の確認を行うまでの間適用する。

一 クラス1機器及びクラス1支持構造物に使用する材料は、次に定めるところによること。

イ クラス1機器又はクラス1支持構造物が、その使用される圧力、温度、水質、放射線、荷重その他の使用条件に対して適切な機械的強度及び化学的成分（使用中の応

力その他の使用条件に対する適切な耐食性を含む。）を有すること。

ロ クラス1容器に使用される材料にあつては、当該容器が使用される圧力、温度、放射線、荷重その他の使用条件に対して適切な破壊じん性を有することを機械試験その他の評価方法により確認したものであること。

ハ クラス1機器（クラス1容器を除く。）又はクラス1支持構造物（クラス1管及びクラス1弁を支持するものを除く。）に使用する材料にあつては、当該機器又は当該支持構造物の最低使用温度に対して適切な破壊じん性を有することを機械試験その他の評価方法により確認したものであること。

ニ クラス1機器又はクラス1支持構造物（棒及びボルトに限る。）に使用する材料にあつては、有害な欠陥がないことを非破壊試験により確認したものであること。

二 クラス2機器及びクラス2支持構造物に使用する材料は、次に定めるところによること。

イ クラス2機器又はクラス2支持構造物が、その使用される圧力、温度、荷重その他の使用条件に対して適切な機械的強度及び化学的成分を有すること。

ロ クラス2機器に使用される材料にあつては、当該機器の最低使用温度に対して適切な破壊じん性を有することを機械試験その他の評価方法により確認したものであること。

ハ クラス2機器に属する鋳造品にあつては、有害な欠陥がないことを非破壊試験により確認したものであること。

四 クラス4管に使用される材料は、当該管が使用される圧力、温度、荷重その他の使用条件に対して適切な機械的強度及び化学的成分を有すること。

五 原子炉格納容器（コンクリート製原子炉格納容器を除く。以下この号において同じ。）及び原子炉格納容器支持構造物に使用される材料は、次に定めるところによること。

イ 原子炉格納容器又は原子炉格納容器支持構造物が、その使用される圧力、温度、湿度、荷重その他の使用条件に対して適切な機械的強度及び化学的成分を有すること。

ロ 原子炉格納容器又は原子炉格納容器支持構造物の最低使用温度に対して適切な破壊じん性を有することを機械試験その他の評価方法により確認したものであること。

六 一部及び鋼製内張り部等に使用される材料は、次に定めるところによること。

イ コンクリートにあつては、有害な膨張及び鉄筋腐食を起さないう、長期の耐久性を有すること。

ハ コンクリート部に強度部材として使用する鉄筋並びに緊張材及び定着具（以下「鉄筋等」という。）にあつては、当該原子炉格納容器が使用される圧力、温度、荷重その他の使用条件に対して適切な機械的強度、化学的成分及び形状寸法を有すること。

ニ 鋼製内張り部等に使用される材料にあつては、前号イ及びロの規定に準ずること。

ハ クラス1容器（オメガシールその他のシールを除く。）、クラス1管、クラス1弁及びクラス1支持構造物にあつては、運転状態I-I-Iにおいて、全体的な塑性変形が生じないこと。ただし、構造上の不連続部における局所的な塑性変形はこの限りでない。

ニ クラス1容器（オメガシールその他のシールを除く。）、クラス1管及びクラス1支持構造物にあつては、運転状態I-Vにおいて、延性破断に至る塑性変形が生じないこと。

ホ クラス1容器（ボルトその他の固定用金具、オメガシールその他のシールを除く。）にあつては、試験状態において、全体的な塑性変形が生じないこと。ただし、構造上の不連続部における局所的な塑性変形はこの限りでない。

ヘ クラス1容器（ボルトその他の固定用金具を除く。）、クラス1管、クラス1弁（弁箱に限る。）及びクラス1支持構造物にあつては、運転状態I及び運転状態I-Iにおいて、進行性変形が生じないこと。

ト クラス1容器、クラス1管、クラス1弁（弁箱に限る。）及びクラス1支持構造物にあつては、運転状態I-I及び運転状態I-I-Iにおいて、疲労破壊が生じないこと。

チ クラス1容器（胴、鏡板及び外側から圧力を受ける円筒形又は管状のものに限る。）にあつては、運転状態I、運転状態I-I、運転状態I-I-I及び運転状態I-V並びに試験状態において、座屈が生じないこと。

リ クラス1管にあつては、設計上定める条件において、座屈が生じないこと。

ル ロ、ハ、ニ、ヘ、ト及びヌにかかわらず、クラス1支持構造物であつて、クラス1容器に溶接により取り付けられ、その損壊により、クラス1容器の損壊を生じさせるおそれがあるものにあつては、クラス1容器の規定に準ずること。

九 クラス2機器及びクラス2支持構造物の構造及び強度は、次に定めるところによること。

イ クラス2機器にあつては、設計上定める条件において、全体的な変形を弾性域に抑えること。

ロ クラス2機器に属する伸縮継手にあつては、設計上定める条件で応力が繰り返し加わる場合において、疲労破壊が生じないこと。

ハ クラス2管（伸縮継手を除く。）にあつては、運転状態I及び運転状態IIにおいて、疲労破壊が生じないこと。

ニ クラス2容器及びクラス2管にあつては、設計上定める条件において、座屈が生じないこと。

ホ クラス2支持構造物であつて、クラス2機器に溶接により取り付けられ、その損壊によりクラス2機器に損壊を生じさせるおそれがあるものにあつては、運転状態I及び運転状態IIにおいて、延性破断及び座屈が生じないこと。

十 クラス3機器の構造及び強度は、次に定めるところによること。

イ 設計上定める条件において、全体的な変形を弾性域に抑えること。

ロ クラス3機器に属する伸縮継手にあつては、設計上定める条件で応力が繰り返し加わる場合において、疲労破壊が生じないこと。

ハ 設計上定める条件において、座屈が生じないこと。

十一 クラス4管の構造及び強度は、設計上定める条件において、延性破断に至る塑性変形を生じないこと。

十二 原子炉格納容器（コンクリート製原子炉格納容器を除く。）及び原子炉格納容器支持構造物の構造及び強度は、次に定めるところによること。

イ 原子炉格納容器（口に掲げる部分を除く。）にあつては、設計上定める条件において、全体的な変形を弾性域に抑えること。

ロ 原子炉格納容器のうち著しい応力が生ずる部分及び特殊な形状の部分にあつては、第八号イ、ハ、ニ及びホのクラス1容器の規定を準用する。

ハ 原子炉格納容器支持構造物にあつては、第八号ロ、ハ及びニのクラス1支持構造物の規定を準用する。

ニ 原子炉格納容器のうち著しい応力が生ずる部分及び特殊な形状の部分並びに原子炉格納容器支持構造物にあつては、運転状態I及び運転状態IIにおいて、進行性変形による破壊が生じないこと。

ホ 原子炉格納容器の伸縮継手にあつては、設計上定める条件で応力が繰り返し加わる場合において、疲労破壊が生じないこと。

ヘ 原子炉格納容器のうち著しい応力が生ずる部分及び特殊な形状の部分並びに原子炉格納容器支持構造物にあつては、運転状態I及び運転状態IIにおいて、疲労破壊が生じないこと。

ト 原子炉格納容器にあつては、設計上定める条件並びに運転状態I及び運転状態IIにおいて、座屈が生じないこと。

チ 原子炉格納容器支持構造物にあつては、運転状態I、運転状態II、運転状態III及び運転状態IVにおいて、座屈が生じないこと。

十三 コンクリート製原子炉格納容器の構造及び強度は、次に定めるところによること。

イ コンクリートにあつては、荷重状態I、荷重状態II及び荷重状態IIIにおいて、圧縮破壊が生じず、かつ、荷重状態IVにおいてコンクリート製原子炉格納容器が大きな塑性変形に至る圧縮破壊が生じないこと。

ロ 鉄筋等にあつては、荷重状態I、荷重状態II及び荷重状態IIIにおいて降伏せず、かつ、荷重状態IVにおいて破断に至るひずみが生じないこと。

ハ コンクリート部にあつては、荷重状態I、荷重状態II及び荷重状態IIIにおいてせん断破壊が生じず、かつ、荷重状態IVにおいてコンクリート製原子炉格納容器が大きな塑性変形に至るせん断破壊が生じないこと。

ニ ライナプレート（貫通部スリーブが取り付く部分を除く。）にあつては、荷重状態I及び荷重状態IIにおいて著しい残留ひずみが生じず、かつ、荷重状態III及び荷重状態IVにおいて破断に至らないこと。

ホ ライナプレート（貫通部スリーブが取り付く部分を除く。）にあつては、ニの規定によるほか、第十二号への原子炉格納容器の規定を準用する。

ヘ ライナプレート（貫通部スリーブが取り付く部分に限る。）貫通部スリーブ及び定着金具（ライナプレートに取り付ける定着金具であつて、全ての荷重状態において全体的な変形を弾性域に抑えることができるものを除く。）にあつては、第十二号ハ、ニ、ヘ及びチの原子炉格納容器支持構造物の規定を準用する。この場合において、第十二号中「運転状態I及び運転状態II」とあるのは、「荷重状態I及び荷重状態II」と、「運転状態I、運転状態II、運転状態III」とあるのは、「荷重状態I、荷重状態II、荷重状態III」と読み替えるものとする。

ト ナツクルにあつては、第十二号ロ、ニ及びヘの原子炉格納容器のうち著しい応力が生ずる部分及び特殊な形状の部分の規定を準用する。

十四 炉心支持構造物の構造及び強度は、次に定めるところによること。

イ 設計上定める条件において、全体的な変形を弾性域に抑えること。

ロ 運転状態I及びIIにおいて、全体的な塑性変形が生じないこと。ただし、構造上の不連続部における局部的な塑性変形はこの限りでない。

ハ 運転状態IVにおいて、延性破断に至る塑性変形が生じないこと。

ニ 炉心支持構造物にあつては、運転状態I及び運転状態IIにおいて、進行性変形による破壊が生じないこと。

ホ 運転状態I及び運転状態IIにおいて、疲労破壊が生じないこと。

ヘ 運転状態I、運転状態II、運転状態III及び運転状態IVにおいて、座屈が生じないこと。

十五 クラス1容器、クラス1管、クラス2容器、クラス2管、クラス3容器、クラス3管、クラス4管及び原子炉格納容器のうち主要な耐圧部の溶接部（溶接金属部及び熱影響部をいう。）は、次に定めるところによること。

イ 不連続で特異な形状でないものであること。

ロ 溶接による割れが生ずるおそれがなく、かつ、健全な溶接部の確保に有害な溶込み

不良その他の欠陥がないことを非破壊試験により確認したものであること。

ハ 適切な強度を有するものであること。

ニ 機械試験その他の評価方法により適切な溶接施工法、溶接設備及び技能を有する溶接士であることをあらかじめ確認したものであり溶接したものであること。

（使用中の亀裂等による破壊の防止）

第十八条 使用中のクラス1機器、クラス1支持構造物、クラス2機器、クラス2支持構造物、クラス3機器、クラス4管、原子炉格納容器、原子炉格納容器支持構造物及び炉心支持構造物には、その破壊を引き起こす亀裂その他の欠陥があつてはならない。

2 使用中のクラス1機器の耐圧部分には、その耐圧部分を貫通する亀裂その他の欠陥があつてはならない。

（流体振動等による損傷の防止）

第十九条 燃料体及び反射材並びに炉心支持構造物、熱遮蔽材並びに一次冷却系統に係る容器、管、ポンプ及び弁は、一次冷却材又は二次冷却材の循環、沸騰その他の一次冷却材又は二次冷却材の挙動により生ずる流体振動又は温度差のある流体の混合その他の一次冷却材又は二次冷却材の挙動により生ずる温度変動により損傷を受けないように施設しなければならぬ。

（安全弁等）

第二十条 設計基準対象施設（蒸気タービン（発電用のものに限る。）、発電機、変圧器及び遮断器を除く。以下この条において同じ。）には、次に定めるところにより安全弁又は逃がし弁（以下この条において「安全弁等」という。）を設けなければならない。

一 安全弁等は、確実に作動する構造を有すること。

二 安全弁等の弁軸は、弁座面からの漏えいを適切に防止できる構造であること。

三 安全弁等の材料は、次に定めるところによること。

イ クラス1容器及びクラス1管に取り付けられる安全弁等の材料にあつては、第十七条第一号の規定に準ずること。

ロ クラス2容器及びクラス2管に取り付けられる安全弁等の材料にあつては、第十七条第二号の規定に準ずること。

四 補助動作装置付きのものにあつては、当該補助動作装置が故障しても所要の吹き出し容量が得られる構造であること。

五 原子炉压力容器(加圧器がある場合は、加圧器。以下この号において同じ。)にあつては、次に定めるところによること。

イ 背圧の影響によりその作動に支障を生ずることを防止するためベローズが設けられた安全弁(第七号において「ベローズ付き安全弁」という。)を適当な箇所二個以上設けること。

ロ 安全弁の容量の合計は、当該安全弁の吹き出し圧力と設置個数とを適切に組み合わせることにより、当該原子炉压力容器の過圧防止に必要な容量以上であること。ただし、安全弁以外の過圧防止効果を有する装置を有するものにあつては、当該装置の過圧防止能力に相当する値を減ずることができると。

六 蒸気発生器にあつては、次に定めるところによること。

イ 安全弁を適当な箇所に二個以上設けること。

ロ 安全弁の容量の合計は、当該安全弁の吹き出し圧力と設置個数とを適切に組み合わせることにより、当該蒸気発生器の過圧防止に必要な容量以上であること。

ハ 安全弁は、吹き出し圧力を下回つた後に、速やかに吹き止まること。

七 減圧弁を有する管であつて、低圧側の部分又はこれに接続する設計基準対象施設に属する容器、管、ポンプ若しくは弁が高圧側の圧力に耐えるように設計されていないものにあつては、次に定めるところによること。

イ クラス1管にあつては、ベローズ付き安全弁を減圧弁の低圧側にこれに接近して二個以上設けること。

ロ イに掲げる管以外の管にあつては、安全弁等を減圧弁の低圧側にこれに接近して一個以上設けること。

ハ 安全弁等の容量の合計は、当該安全弁等の吹き出し圧力と設置個数とを適切に組み合わせることにより、減圧弁が全開したとき管の低圧側の部分及びこれに接続する設計基準対象施設に属する容器、管、ポンプ若しくは弁の過圧防止に必要な容量以上であること。

二 安全弁は、吹き出し圧力を下回つた後に、速やかに吹き止まること。

八 設計基準対象施設に属する容器(第五号、第六号及び第三項に掲げる容器、補助ボイラー並びに原子炉格納容器を除く。)又は管(前号に掲げるものを除く。)であつて、内部に過圧が生ずるおそれがあるものにあつては、第六号並びに前号イ、ロ及びニの規定に準じて安全弁等を適当な箇所に設けること。

二 前項の場合において、安全弁等の入口側又は出口側に破壊板を設ける場合は、次に定めるところによらなければならない。

一 安全弁等の入口側に設ける場合は、次に定めるところによること。

イ 破壊板の吹き出し圧力は、当該容器の最高使用圧力以下の圧力であること。

ロ 破壊板の破壊により安全弁等の機能を損なわなければならないこと。

二 安全弁等の出口側に設ける場合は、次に定めるところによること。

イ 破壊板は、安全弁等の作動を妨げないように低圧で破壊するものであること。

ロ 破壊板の吹き出し圧力が、安全弁等の吹き出し圧力を加えた圧力が、過圧防止に必要な吹き出し圧力より小さくなること。

ハ 破壊板を支持する構造は、流体が排出する場合の通過面積が安全弁等の出口の面積以上となるものであること。

二 破壊板の破壊により吹き出し管の機能を損なわなければならないこと。

五 設計基準対象施設に属する容器又は管であつて、内部が大気圧未満となることにより外面に設計上定める圧力を超える圧力を受けるおそれがあるものには、次に定めるところにより過圧防止に必要な容量以上となるように真空破壊弁を設けなければならない。

一 真空破壊弁の材料は、次に定めるところによること。

イ クラス1容器及びクラス1管に取り付けられる真空破壊弁の材料にあつては、第七号第一号の規定に準ずること。

ロ 原子炉格納容器、クラス2容器及びクラス2管に取り付けられる真空破壊弁の材料にあつては、第十七号第二号の規定に準ずること。

二 原子炉格納容器にあつては、真空破壊弁を適当な箇所に二個以上設けること。

三 前号に掲げる容器以外の容器又は管にあつては、真空破壊弁を適当な箇所に一個以上設けること。

六 設計基準対象施設は、安全弁等、破壊板又は真空破壊弁から放出される流体が放射性物質を含む場合は、これを安全に処理することができるとして施設しなければならない。

(耐圧試験等)

第二十一条 クラス1機器、クラス2機器、クラス3機器、クラス4管及び原子炉格納容器は、次に定めるところによる圧力で耐圧試験を行つたとき、これに耐え、かつ、著しい漏えいがないものでなければならない。ただし、気圧により試験を行う場合であつて、当該圧力に耐えることが確認された場合は、当該圧力を最高使用圧力(原子炉格納容器にあつては、最高使用圧力の〇・九倍)までに減じて著しい漏えいがないことを確認することができる。

一 内圧を受ける機器に係る耐圧試験の圧力は、機器の最高使用圧力を超え、かつ、機器に生ずる全体的な変形が弾性域の範囲内となる圧力とすること。ただし、クラス1機器、クラス2管又はクラス3管であつて原子炉压力容器と一体で耐圧試験を行う場合の圧力については、通常運転時の圧力を超える圧力とすることができる。

二 内部が大気圧未満になることにより、大気圧による外圧を受ける機器の耐圧試験の圧力は、大気圧と内圧との最大の差を上回る圧力とする。

とすること。この場合において、耐圧試験の圧力は機器の内面から加えることができる。

二 クラス1機器、クラス2機器、クラス3機器及びクラス4管は、通常運転時における圧力で漏えい試験を行ったとき、著しい漏えいがないものでなければならない。

三 原子炉格納容器は、最高使用圧力の〇・九倍に等しい気圧で気密試験を行ったとき、著しい漏えいがないものでなければならない。

(監視試験片)

第二十二号 設計基準対象施設に属する容器であつて、一メガ電子ボルト以上の中性子の照射を受けその材料が著しく劣化するおそれがあるものの内部には、当該容器が想定される運転状態において脆性破壊を引き起こさないようにするために、照射の影響を確認できるように定める監視試験片を備えなければならない。

一 監視試験片の材料は、中性子の照射領域にある容器の材料と同等の製造履歴を有するものであること。

二 監視試験片は、容器の使用開始後に取り出して試験を実施することにより、容器の材料の機械的強度及び破壊じん性の変化を確認できる個数とすること。

三 監視試験片は、中性子の照射領域にある容器の材料が受ける中性子スペクトル、中性子照射量及び温度履歴の条件と同等の条件になるように配置すること。

第二十三条 燃料体、減速材及び反射材並びに炉心支持構造物の材料は、通常運転時における圧力、温度及び放射線に起因する最も厳しい条件において、必要な物理的及び化学的性質を保持するものでなければならない。

二 燃料体、減速材及び反射材並びに炉心支持構造物は、最高使用圧力、自重、附加荷重その他の燃料体、減速材及び反射材並びに炉心支持構造物に加わる負荷に耐えるものでなければならない。

第二十四条 放射線により材料が著しく劣化するおそれがある原子炉压力容器には、これを防止するため熱遮蔽材を施設しなければならない。前項の熱遮蔽材は、熱応力による変形により発電用原子炉の運転に支障を及ぼすことがないように施設しなければならない。

(一次冷却材)

第二十五条 一次冷却材は、通常運転時における

圧力、温度及び放射線によって起る最も厳しい条件において、必要な物理的及び化学的性質を保持するものでなければならない。

(燃料取扱設備及び燃料貯蔵設備)

第二十六条 通常運転時に使用する燃料体又は使用済燃料(以下この条において「燃料体等」という。)を取り扱う設備は、次に定めるところにより施設しなければならない。

- 一 燃料体等を取り扱う能力を有するものであること。
- 二 燃料体等が臨界に達するおそれがない構造であること。
- 三 崩壊熱により燃料体等が溶融しないものであること。
- 四 取扱中に燃料体等が破損しないこと。
- 五 燃料体等を封入する容器は、取扱中における衝撃、熱その他の容器に加わる負荷に耐え、かつ、容易に破損しないものであること。
- 六 前号の容器は、内部に燃料体等を入れた場合に、放射線障害を防止するため、その表面の線量当量率及びその表面から一メートル距離における線量当量率がそれぞれ原子力規制委員会の定める線量当量率を超えないように遮蔽できるものであること。ただし、管理区域内においてのみ使用されるものについては、この限りでない。
- 七 燃料体等の取扱中に燃料体等を取り扱うための動力源がなくなった場合に、燃料体等を保持する構造を有する機器を設けることにより燃料体等の落下を防止できること。
- 八 燃料体等を貯蔵する設備は、次に定めるところにより施設しなければならない。

二 崩壊熱により燃料体等が溶融しないものであること。

三 崩壊熱により燃料体等が溶融しないものであること。

四 取扱中に燃料体等が破損しないこと。

五 燃料体等を封入する容器は、取扱中における衝撃、熱その他の容器に加わる負荷に耐え、かつ、容易に破損しないものであること。

六 前号の容器は、内部に燃料体等を入れた場合に、放射線障害を防止するため、その表面の線量当量率及びその表面から一メートル距離における線量当量率がそれぞれ原子力規制委員会の定める線量当量率を超えないように遮蔽できるものであること。ただし、管理区域内においてのみ使用されるものについては、この限りでない。

七 燃料体等の取扱中に燃料体等を取り扱うための動力源がなくなった場合に、燃料体等を保持する構造を有する機器を設けることにより燃料体等の落下を防止できること。

八 燃料体等を貯蔵する設備は、次に定めるところにより施設しなければならない。

九 燃料体等が臨界に達するおそれがない構造であること。

十 崩壊熱により燃料体等が溶融しないものであること。

十一 燃料体等を有するものであること。

十二 使用済燃料その他高放射線の燃料体を貯蔵する水槽(以下「使用済燃料貯蔵槽」という。)は、次に定めるところによること。

イ 放射性物質を含む水があふれ、又は漏れない構造であること。
ロ 使用済燃料その他高放射線の燃料体の放射線を遮蔽するために必要な量の水があること。

ハ 使用済燃料その他高放射線の燃料体の被覆が著しく腐食するおそれがある場合は、これを防止すること。

ニ 燃料体等の取扱中に想定される燃料体等の落下時及び重量物の落下時においてもその機能が損なわれないこと。

五 燃料体等の落下により燃料体等が破損して放射性物質が放出されることに伴い公衆に放射線障害を及ぼすおそれがある場合、放射性物質による敷地外への影響を低減するため、燃料貯蔵設備の格納施設及び放射性物質の放出を低減する発電用原子炉施設を施設すること。

六 使用済燃料を工場等内に貯蔵する乾式キャスク(以下「キャスク」という。)は、次に定めるところによること。

イ 使用済燃料が内包する放射性物質を適切に閉じ込めることができ、かつ、その機能を適切に監視できること。

ロ 使用済燃料からの放射線に対して適切な遮蔽能力を有すること。

ハ 使用済燃料の被覆材の著しい腐食又は変形を防止できること。

ニ キャスク本体その他のキャスクを構成する部材は、使用される温度、放射線、荷重その他の条件に対し、適切な材料及び構造であること。

七 取扱者以外の者がみだりに立ち入らないようにすること。

第二十七条 原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する機器は、一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊その他の異常に伴う衝撃、炉心の反応度の変化による荷重の増加その他の原子炉冷却材圧力バウンダリを構成する機器に加わる負荷に耐えるように施設しなければならない。

(原子炉冷却材圧力バウンダリの隔離装置等)

第二十八条 原子炉冷却材圧力バウンダリには、原子炉冷却材の流出を制限するよう、隔離装置を施設しなければならない。

二 発電用原子炉施設には、原子炉冷却材圧力バウンダリからの原子炉冷却材の漏えいを検出する装置を施設しなければならない。

(二次冷却材処理装置)

第二十九条 放射性物質を含む一次冷却材(第三十三条第四号の装置から排出される放射性物質を含む流体を含む。)を通常運転時において一

次冷却系統外に排出する場合は、これを安全に処理する装置を施設しなければならない。(逆止め弁)

第三十条 放射性物質を含む一次冷却材を内包する容器若しくは管又は放射性廃棄物を処理する設備(排気筒並びに第四十条及び第四十三条に規定するものを除く。第四十七条において同じ。)へ放射性物質を含まない流体を導く管には、逆止め弁を設けなければならない。ただし、放射性物質を含む流体が放射性物質を含まない流体を導く管に逆流するおそれがない場合は、この限りでない。(蒸気タービン)

第三十一条 第十七条第十五号の規定及び発電用火設備に関する技術基準を定める省令(平成九年通商産業省令第五十一号)第三章の規定は、設計基準対象施設に施設する蒸気タービンについて準用する。(非常用炉心冷却設備)

第三十二条 発電用原子炉施設には、非常用炉心冷却設備を施設しなければならない。

二 非常用炉心冷却設備は、次の機能を有するものでなければならない。

一 燃料被覆材の温度が燃料材の溶融又は燃料体の著しい破損を生ずる温度を超えて上昇することを防止できるものであること。

二 燃料被覆材と冷却材との反応により著しく多量の水素を生ずるものでないこと。

三 非常用炉心冷却設備は、原子炉圧力容器内又は原子炉格納容器内の圧力及び温度並びに冷却材中の異物の影響につき想定される最も厳しい条件下においても、正常に機能する能力を有するものでなければならない。

四 非常用炉心冷却設備は、その能力の維持状況を確認するため、発電用原子炉の運転中に試験ができるように施設しなければならない。(循環設備等)

第三十三条 発電用原子炉施設には、次に掲げる設備を施設しなければならない。

一 原子炉圧力容器内において発生した熱を除去するために、熱を輸送することができる容量の一次冷却材を循環させる設備

二 負荷の変動その他の発電用原子炉の運転に伴う原子炉圧力容器内の圧力の変動を自動的に調整する設備

三 通常運転時又は一次冷却材の小規模漏えい時に発生した一次冷却材の減少分を自動的に補給する設備

四 一次冷却材中の不純物及び放射性物質の濃度を発電用原子炉施設の運転に支障を及ぼさない値以下に保つ設備

五 発電用原子炉停止時(全交流動力電源喪失時から重大事故等に対処するために必要な電力の供給が交流動力電源設備から開始されるまでの間を含む。)に原子炉圧力容器内において発生した残留熱を除去することができる設備

六 前号の設備により除去された熱を最終ヒートシンクへ輸送することができる設備(計測装置)

第三十四条 発電用原子炉施設には、次に掲げる事項を計測する装置を施設しなければならない。ただし、直接計測することが困難な場合は、当該事項を間接的に測定する装置を施設することをもって、これに代えることができる。

一 炉心における中性子束密度

二 炉周期

三 制御棒の位置及び液体制御材を使用する場合にあつては、その濃度

四 一次冷却材に関する次の事項
イ 放射性物質及び不純物の濃度
ロ 原子炉圧力容器の入口及び出口における圧力、温度及び流量

五 原子炉圧力容器(加圧器がある場合は、加圧器)内及び蒸気発生器内の水位

六 原子炉格納容器内の圧力、温度、可燃性ガスの濃度、放射性物質の濃度及び線量当量率

七 主蒸気管中及び空気抽出器その他の蒸気タービン又は復水器に接続する設備であつて放射性物質を内包する設備の排ガス中の放射性物質の濃度

八 蒸気発生器の出口における二次冷却材の圧力、温度及び流量並びに二次冷却材中の放射性物質の濃度

九 排気筒の出口又はこれに近接する箇所における排気中の放射性物質の濃度

十 排水口又はこれに近接する箇所における排水中の放射性物質の濃度

十一 放射性物質により汚染するおそれがある管理区域(管理区域のうち、その場所における外部放射線に係る線量のみが実用炉規則第二条第二項第四号に規定する線量を超えるおそれがある場所を除いた場所をいう。以下同じ。)内に開口部がある排水路の出口又はこ

れに近接する箇所における排水中の放射性物質の濃度

十二 管理区域内において人が常時立ち入る場所（燃料取扱場所その他の放射線業務従事者に対する放射線障害の防止のための措置を必要とする場所をいう。）の線量当量率

十三 周辺監視区域に隣接する地域における空間線量率及び放射性物質の濃度
十四 使用済燃料その他高放射性の燃料体を貯蔵する水槽の水温及び水位
十五 敷地内における風向及び風速

2 前項第六号に掲げる装置であつて線量当量率を計測する装置にあつては、多重性及び独立性を確保しなければならない。
3 第一項第十二号から第十四号までに掲げる事項を計測する装置（同項第十二号に掲げる事項を計測する装置にあつては、燃料取扱設備及び燃料貯蔵設備に属するものに限る。）にあつては、外部電源が喪失した場合においてもこれらの事項を計測することができるものでなければならない。

4 第一項第一号及び第三号から第十五号までに掲げる事項を計測する装置にあつては、計測結果を表示し、記録し、及びこれを保存することができるものでなければならない。ただし、設計基準事故時の放射性物質の濃度及び線量当量率を計測する主要な装置以外の装置であつて、断続的に試料の分析を行う装置については、運転員その他の従事者が測定結果を記録し、及びこれを保存し、その記録を確認することをもって、これに代えることができる。

（安全保護装置）
第三十五条 発電用原子炉施設には、安全保護装置を次に定めるところにより施設しなければならない。

一 運転時の異常な過渡変化が発生する場合は地震の発生により発電用原子炉の運転に支障が生ずる場合において、原子炉停止システムその他系統と併せて機能することにより、燃料要素の許容損傷限界を超えないようにできるものであること。

二 系統を構成する機械若しくは器具又はチャネルは、単一故障が起きた場合又は使用状態からの単一の取り外しを行った場合において、安全保護機能を失わないよう、多重性を確保すること。

三 系統を構成するチャネルは、それぞれ互いに分離し、それぞれのチャネル間において安全保護機能を失わないように独立性を確保すること。

四 駆動源の喪失、系統の遮断その他の不利な状況が生じた場合においても、発電用原子炉施設をより安全な状態に移行するか、又は当該状態を維持することにより、発電用原子炉施設の安全上支障がない状態を維持できること。

五 不正アクセス行為その他の電子計算機に使用目的に沿うべき動作をさせず、又は使用目的に反する動作をさせる行為による被害を防止するために必要な措置が講じられているものであること。

六 計測制御系の一部を安全保護装置と共用する場合においては、その安全保護機能を失わないよう、計測制御系から機能的に分離されたものであること。

七 発電用原子炉の運転中に、その能力を確認するための必要な試験ができるものであること。
八 運転条件に応じて作動設定値を変更できるものであること。

第三十六条 発電用原子炉施設には、反応度制御系統を施設しなければならない。

2 反応度制御系統は、二つ以上の独立した制御棒、液体制御材その他の反応度を制御する系統を有するものであり、かつ、計画的な出力変化に伴う反応度変化を燃料要素の許容損傷限界を超えることなく制御できる能力を有するものでなければならない。

3 原子炉停止系統は、次の能力を有するものでなければならない。

一 通常運転時の高温状態において、二つ以上の独立した系統がそれぞれ発電用原子炉を未臨界に移行し、及び未臨界を維持できるものであり、かつ、運転時の異常な過渡変化時の高温状態においても原子炉停止系統のうち少なくとも一つは、燃料要素の許容損傷限界を超えることなく発電用原子炉を未臨界に移行し、及び未臨界を維持できること。この場合において、非常用炉心冷却設備その他の発電用原子炉施設の安全性を損なうおそれがある場合に作動する設備の作動に伴って注入される液体制御材による反応度値を加えることができる。

二 通常運転時及び運転時の異常な過渡変化時における低温状態において、少なくとも一つは、発電用原子炉を未臨界に移行し、及び未臨界を維持できること。

三 一次冷却材喪失その他の設計基準事故時において、少なくとも一つは、発電用原子炉を未臨界へ移行することができること、かつ、少なくとも一つは、発電用原子炉を未臨界に維持できること。この場合において、非常用炉心冷却設備その他の発電用原子炉施設の安全性を損なうおそれがある場合に作動する設備の作動に伴って注入される液体制御材による反応度値を加えることができる。

四 制御棒を用いる場合にあつては、反応度値の最も大きな制御棒一本が固着した場合においても前三号の規定に適合すること。

4 制御棒の最大反応度値及び反応度添加率は、想定される反応度投入事象（発電用原子炉に反応度が異常に投入される事象をいう。）に対して原子炉冷却材圧力バウンダリを破損せず、かつ、炉心の冷却機能を損なうような炉心、炉心支持構造物及び原子炉圧力容器内部構造物の損壊を起こさないものでなければならない。

5 制御棒、液体制御材その他の反応度を制御する設備は、通常運転時における圧力、温度及び放射線に起因する最も厳しい条件において、必要な物理的及び化学的性質を保持するものでなければならない。

第三十七条 制御材を駆動する装置は、次に定めるところにより施設しなければならない。

一 発電用原子炉の特性に適合した速度で制御材を駆動できるものであること。
二 発電用原子炉の通常運転時において制御棒の異常な引き抜きが発生した場合においても、燃料要素の許容損傷限界を超える速度で駆動できないものであること。

三 制御棒の駆動動力源が喪失した場合に、発電用原子炉の反応度を増加させる方向に制御棒を動作させないものであること。
四 制御棒を駆動する装置にあつては、制御棒の挿入その他の衝撃により制御棒、燃料体、反射材その他の炉心を構成するものを損壊しないものであること。

第三十八条 発電用原子炉施設には、原子炉制御室を施設しなければならない。

2 原子炉制御室には、反応度制御系統及び原子炉停止系統に係る設備を操作する装置、非常用炉心冷却設備その他の非常時に発電用原子炉の安全を確保するための設備を操作する装置、発電用原子炉及び一次冷却系統に係る主要な機械又は器具の動作状態を表示する装置、主要計測装置の計測結果を表示する装置その他の発電用原子炉を安全に運転するための主要な装置（第四十七条第一項に規定する装置を含む。）を集中し、かつ、誤操作することなく適切に運転操作することができるよう施設しなければならない。

3 原子炉制御室には、発電用原子炉施設の外部の状況を把握するための装置を施設しなければならない。

4 発電用原子炉施設には、火災その他の異常な事態により原子炉制御室が使用できない場合に、原子炉制御室以外の場所から発電用原子炉の運転を停止し、かつ、安全な状態に維持することができる装置を施設しなければならない。

5 一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊又は故障その他の異常が発生した場合に発電用原子炉の運転の停止その他の措置をとるため、従事者が支障なく原子炉制御室に入り、又は一定期間とどまり、かつ、当該措置をとるための操作を行うことができるよう、次の各号に掲げる場所の区分に応じ、当該各号に定める防護措置を講じなければならない。

一 原子炉制御室及びその近傍並びに有毒ガスの発生源の近傍 工場等内における有毒ガスの発生を検出するための装置及び当該装置が有毒ガスの発生を検出した場合に原子炉制御室において自動的に警報するための装置の設置

二 原子炉制御室及びこれに連絡する通路並びに運転員その他の従事者が原子炉制御室に入りするための区域 遮蔽その他の適切な放射線防護措置、気体状の放射性物質及び原子炉制御室外の火災により発生する燃焼ガスに対する換気設備の隔離その他の適切な防護措置

6 原子炉制御室には、酸素濃度計を施設しなければならない。

第三十九条 工場等には、次に定めるところにより放射性廃棄物処理する設備（排気筒を含む）

第三十九条 工場等には、次に定めるところにより放射性廃棄物処理する設備（排気筒を含む）

み、次条及び第四十三条に規定するものを除く。）を施設しなければならない。

一 周辺監視区域の外の空気中及び周辺監視区域の境界における水中の放射性物質の濃度が、それぞれ原子力規制委員会の定める濃度限度以下になるように発電用原子炉施設において発生する放射性廃棄物を処理する能力を有するものであること。

二 放射性廃棄物以外の廃棄物を処理する設備と区別して施設すること。ただし、放射性廃棄物以外の流体状の廃棄物を流体状の放射性廃棄物を処理する設備に導く場合において、流体状の放射性廃棄物が放射性廃棄物以外の廃棄物を取り扱う設備に逆流するおそれがない場合は、この限りでない。

三 放射性廃棄物が漏えいし難い構造であり、かつ、放射性廃棄物に含まれる化学薬品の影響その他の負荷により著しく腐食しないものであること。

四 気体状の放射性廃棄物を処理する設備は、第四十三条第三号の規定に準ずるほか、排気筒の出口以外の箇所において気体状の放射性廃棄物を排出しないこと。

五 流体状の放射性廃棄物及び原子炉冷却材圧力バウンダリ内に施設されたものから発生する高放射性の固体状の放射性廃棄物を工場等内において運搬するための容器は、取扱中における衝撃その他の負荷に耐え、かつ、容易に破損しないものであること。ただし、管理区域内においてのみ使用されるものについては、この限りでない。

六 前号の容器は、内部に放射性廃棄物を入れた場合に、放射線障害を防止するため、その表面の線量当量率及びその表面から一メートルの距離における線量当量率が原子力規制委員会の定める線量当量率を超えないよう、遮蔽できるものであること。ただし、管理区域内においてのみ使用されるものについては、この限りでない。

二 流体状の放射性廃棄物を処理する設備が設置される放射性廃棄物処理施設（流体状の放射性廃棄物の漏えいが拡大するおそれがある部分に限る。以下この項において同じ。）は、次に定めるところにより施設しなければならない。

- 一 放射性廃棄物処理施設内部の床面は、床面の傾斜又は床面に設けられた溝の傾斜により流体状の放射性廃棄物が排液受け口に導かれる構造であり、かつ、流体状の放射性廃棄物（気体状のものを除く。以下同じ。）を処理する設備の周辺部には、流体状の放射性廃棄物の漏えいの拡大を防止するための堰が施設されていること。
- 二 放射性廃棄物処理施設外に通じる出入口又はその周辺部には、流体状の放射性廃棄物が放射性廃棄物処理施設外へ漏えいすることを防止するための堰が施設されていること。ただし、放射性廃棄物処理施設内部の床面が隣接する発電用原子炉施設の床面又は地表面より低い場合であつて、放射性廃棄物処理施設外へ漏えいするおそれがない場合は、この限りでない。
- 三 工場等外に排水を排出する排水路（湧水に係るものであつて放射性物質により汚染するおそれがある管理区域内に開口部がないもの並びに排水監視設備及び放射性物質を含む排水を安全に処理する設備を施設するものを除く。）上に放射性廃棄物処理施設内部の床面がないよう、施設すること。
- 四 第一項第五号の流体状の放射性廃棄物を運搬するための容器は、前項第三号に準じて流体状の放射性廃棄物の漏えいの拡大を防止するように施設しなければならない。ただし、管理区域内においてのみ使用されるもの及び漏えいするおそれがない構造のものは、この限りでない。（廃棄物貯蔵設備等）

第四十条 放射性廃棄物を貯蔵する設備は、次に定めるところにより施設しなければならない。

- 一 通常運転時に発生する放射性廃棄物を貯蔵する容量があること。
- 二 放射性廃棄物が漏えいし難い構造であること。
- 三 崩壊熱及び放射線の照射により発生する熱に耐え、かつ、放射性廃棄物に含まれる化学薬品の影響その他の負荷により著しく腐食しないこと。

二 固体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備が設置される発電用原子炉施設は、放射性廃棄物による汚染が広がらないように施設しなければならない。

三 前条第二項の規定は、流体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備が設置される放射性廃棄物処理施設について準用する。この場合において、「流体状の放射性廃棄物を処理する設備」とあるのは「流体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備」と読み替えるものとする。（放射性物質による汚染の防止）

施設について準用する。この場合において、「流体状の放射性廃棄物を処理する設備」とあるのは「流体状の放射性廃棄物を貯蔵する設備」と読み替えるものとする。（放射性物質による汚染の防止）

第四十一条 発電用原子炉施設のうち、人が頻繁に出入りする建物の内部の壁、床その他の放射性物質により汚染されるおそれがある部分であつて、人が触れるおそれがある部分の表面は、放射性物質による汚染を除去しやすいものでなければならない。

二 発電用原子炉施設には、人が触れるおそれがある物の放射性物質による汚染を除去する設備を施設しなければならない。

三 放射性物質により汚染されるおそれがある管理区域内に開口部がある排水路であつて、工場等外に排水を排出するものには、排水監視設備及び放射性物質を含む排水を安全に処理する設備を施設しなければならない。

第四十二条 設計基準対象施設は、通常運転時において発電用原子炉施設からの直接線及びブスカイシャイン線による工場等周辺の空間線量率が原子力規制委員会の定める線量限度を十分下回るように施設しなければならない。

二 工場等内における外部放射線による放射線障害を防止する必要がある場所には、次に定めるところにより生体遮蔽を施設しなければならない。

- 一 放射線障害を防止するために必要な遮蔽能力を有するものであること。
- 二 開口部又は配管その他の貫通部があるものにあつては、必要に応じて放射線漏えい防止措置が講じられていること。
- 三 自重、附加荷重及び熱応力に耐えるものであること。（換気設備）

第四十三条 発電用原子炉施設内の放射性物質により汚染された空気による放射線障害を防止する必要がある場所には、次に定めるところにより換気設備を施設しなければならない。

- 一 放射線障害を防止するために必要な換気能力を有するものであること。
- 二 放射性物質により汚染された空気が漏えい及び逆流し難い構造であること。
- 三 排出する空気を浄化する装置を設ける場合にあつては、ろ過装置の放射性物質による汚染の除去又はろ過装置の取替えが容易な構造であること。

染の除去又はろ過装置の取替えが容易な構造であること。

四 吸気口は、放射性物質により汚染された空気を吸入し難いように施設すること。（原子炉格納施設）

第四十四条 発電用原子炉施設には、一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊又は故障の際に漏えいする放射性物質が公衆に放射線障害を及ぼすおそれがないよう、次に定めるところにより原子炉格納施設を施設しなければならない。

一 原子炉格納容器にあつては、次に定めるところによること。

イ 一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊又は故障の際に想定される最大の圧力及び最高の温度に耐えること。

ロ 原子炉格納容器に開口部を設ける場合には気密性を確保すること。

ハ 原子炉格納容器を貫通する箇所及び出入口は、想定される漏えい量その他の漏えい試験に影響を与える環境条件に応じて漏えい試験ができること。

二 原子炉格納容器を貫通して取り付ける管には、次により隔離弁（閉鎖隔離弁（ロック装置）が付されているものに限る。）又は自動隔離弁（隔離機能がない逆止め弁を除く。）を設けること。

- イ 原子炉格納容器に取り付ける管であつて原子炉格納容器を貫通するものには、当該貫通箇所の内側及び外側であつて近接した箇所に一個の隔離弁を施設すること。
- ロ イの規定にかかわらず、次に掲げるところにより隔離弁を施設することをもって、イの規定による隔離弁の設置に代えることができる。
- (1) 一次冷却系統に係る発電用原子炉施設内及び原子炉格納容器内に開口部がなく、かつ、一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊の際に損壊するおそれがない管又は一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊その他の異常の際に構造上内部に滞留する液体により原子炉格納容器内の放射性物質が外部へ漏えいするおそれがない管にあつては、貫通箇所の内側又は外側の近接した箇所に一個の隔離弁を施設すること。

- (2) 貫通箇所の内側又は外側に隔離弁を設ける場合には、一方の側の設置箇所における管であつて、湿気その他の隔離弁の機能に影響を与える環境条件によりその隔離弁の機能が著しく低下するおそれがあると認められるものにあつては、貫通箇所の外側であつて近接した箇所に二個の隔離弁を施設すること。
- (3) 前二号の規定にかかわらず、配管に圧力開放板を適切に設ける場合には、原子炉格納容器の内側又は外側に通常時において閉止された一個の隔離弁を設けること。
- ハ イ及びロの規定にかかわらず、次の場合には隔離弁を設けることを要しない。
 - (1) 設計基準事故及び重大事故等の収束に必要な系統の配管に隔離弁を設けることにより安全性を損なうおそれがあり、かつ、当該系統の配管により原子炉格納容器の隔離機能が失われない場合
 - (2) 計測制御系統施設又は制御棒駆動装置に関連する配管であつて、当該配管を通じての漏えい量が十分許容される程度に抑制されているもの場合
- ニ 隔離弁は、閉止後において駆動動力源が喪失した場合においても隔離機能が失われないこと。
- ホ 隔離弁は、想定される漏えい量その他の漏えい試験に影響を与える環境条件に応じて漏えい試験ができること。
- 三 一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊又は故障の際に生ずる水素及び酸素により原子炉格納容器の安全性を損なうおそれがある場合は、水素又は酸素の濃度を抑制する設備を施設すること。
- 四 一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊又は故障の際に原子炉格納容器から気体状の放射性物質が漏えいすることにより公衆に放射線障害を及ぼすおそれがある場合は、当該放射性物質の濃度を低減する設備（当該放射性物質を格納する設備を含む）を施設すること。
- 五 一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊又は故障の際に生ずる原子炉格納容器内の圧力及び温度の上昇により原子炉格納容器の

- 安全性を損なうことを防止するため、原子炉格納容器内において発生した熱を除去する設備（以下「格納容器熱除去設備」という。）を次により施設すること。
 - イ 格納容器熱除去設備は、原子炉格納容器内の圧力及び温度並びに冷却材中の異物の影響の想定される最も厳しい条件下においても、正常に機能すること。
 - ロ 格納容器熱除去設備は、その能力を確認するため、発電用原子炉の運転中に試験ができること。
- 第四十五条 発電用原子炉施設には、電線路及び当該発電用原子炉施設において常時使用される発電機からの電力の供給が停止した場合において発電用原子炉施設の安全性を確保するために必要な装置の機能を維持するため、内燃機関を原動力とする発電設備又はこれと同等以上の機能を有する非常用電源設備を施設しなければならない。**
- 2 設計基準対象施設の安全性を確保する上で特に必要な設備には、無停電源装置又はこれと同等以上の機能を有する装置を施設しなければならない。
- 3 保安電源設備（安全施設へ電力を供給するための設備をいう。）には、第一項の電線路、当該発電用原子炉施設において常時使用される発電機及び非常用電源設備から発電用原子炉施設の安全性を確保するために必要な装置への電力の供給が停止することがないよう、次に掲げる措置を講じなければならない。
 - 一 高エネルギーのアーカ放電による電気盤の損壊の拡大を防止するために必要な措置
 - 二 前号に掲げるもののほか、機器の損壊、故障その他の異常を検知し、及びその拡大を防止するために必要な措置
- 4 設計基準対象施設に接続する第一項の電線路のうち少なくとも二回線は、それぞれ互いに独立したものであつて、当該設計基準対象施設において受電可能なものであつて、使用電圧が六万ボルトを超える特別高圧のものであり、かつ、それにより当該設計基準対象施設を電力系統に連系するように施設しなければならない。
- 5 前項の電線路のうち少なくとも一回線は、当該設計基準対象施設において他の回線と物理的に分離して受電できるように施設しなければならない。

- 6 設計基準対象施設に接続する電線路は、同一敷地内の二以上の発電用原子炉施設を電力系統に連系する場合には、いずれの二回線が喪失した場合においても電力系統からそれらの発電用原子炉施設への電力の供給が同時に停止しないように施設しなければならない。
- 7 非常用電源設備及びその附属設備は、多重性又は多様性を確保し、及び独立性を確保し、その系統を構成する機械又は器具の単一故障が発生した場合であっても、運転時の異常な過渡変化時又は設計基準事故時において工学的安全施設及び設計基準事故に対処するための設備がその機能を確保するために十分な容量を有するものでなければならない。
- 8 設計基準対象施設は、他の発電用原子炉施設に属する非常用電源設備から受電する場合には、当該非常用電源設備から供給される電力に過度に依存しないように施設しなければならない。
- （緊急時対策所）**
- 第四十六条 工場等には、一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊その他の異常が発生した場合に適切な措置をとるため、緊急時対策所を原子炉制御室以外の場所に施設しなければならない。**
- 2 緊急時対策所及びその近傍並びに有毒ガスの発生源の近傍には、有毒ガスが発生した場合に適切な措置をとるため、工場等内における有毒ガスの発生を検出するための装置及び当該装置が有毒ガスの発生を検出した場合に緊急時対策所において自動的に警報するための装置の設置その他の適切な防護措置を講じなければならない。

- の著しい低下を確実に検知し、自動的に警報する装置を施設しなければならない。ただし、発電用原子炉施設が、使用済燃料貯蔵槽の水温の著しい上昇又は使用済燃料貯蔵槽の水位の著しい低下に自動的に対処する機能を有している場合は、この限りでない。
- 3 発電用原子炉施設には、発電用原子炉並びに一次冷却系統及び放射性廃棄物を処理し、又は貯蔵する設備に係る主要な機械又は器具の動作状態を表示する装置を施設しなければならない。
- 4 工場等には、一次冷却系統に係る発電用原子炉施設の損壊又は故障の際に発電用原子炉施設内の人に対し必要な指示ができるよう、警報装置及び多様性を確保した通信連絡設備を施設しなければならない。
- 5 工場等には、設計基準事故が発生した場合において当該発電用原子炉施設外の通信連絡を必要とする場所と通信連絡ができるよう、多様性を確保した専用通信回線を施設しなければならない。
- （準用）**
- 第四十八条 第十七条第十五号の規定及び発電用火力設備に関する技術基準を定める省令第二章の規定は、設計基準対象施設に施設する補助ボイラーについて準用する。**
- 2 発電用火力設備に関する技術基準を定める省令第十九条から第二十三条までの規定は、設計基準対象施設に施設するガスタービンについて準用する。
- 3 発電用火力設備に関する技術基準を定める省令第二十五条から第二十九条までの規定は、設計基準対象施設に施設する内燃機関について準用する。
- 4 原子力発電用工作物に係る電気設備に関する技術基準を定める省令（平成二十四年経済産業省令第七十号）第四条から第十六条まで、第十九条から第二十八条まで及び第三十条から第三十五条までの規定は、設計基準対象施設に施設する電気設備について準用する。
- 第三章 重大事故等対処施設**
- （重大事故等対処施設の地盤）**
- 第四十九条 重大事故等対処施設は、次に掲げる施設の区分に応じ、それぞれ次に定める地盤を施設しなければならない。**
 - 一 重大事故防止設備のうち常設のもの（以下「常設重大事故防止設備」という。）であつ

て、耐震重要施設に属する設計基準事故対処設備が有する機能を代替するもの（以下「常設耐震重要重大事故等対処施設」という。）が設置される重大事故等対処施設（特定重大事故等対処施設を除く。）基準地震動による地震力が作用した場合においても当該重大事故等対処施設を十分に支持することができる地盤

二 常設耐震重要重大事故防止設備以外の常設重大事故防止設備が設置される重大事故等対処施設（特定重大事故等対処施設を除く。）設置許可基準規則第四条第二項の規定により算定する地震力が作用した場合においても当該重大事故等対処施設を十分に支持することができる地盤

三 重大事故緩和設備のうち常設のもの（以下「常設重大事故緩和設備」という。）が設置される重大事故等対処施設（特定重大事故等対処施設を除く。）基準地震動による地震力が作用した場合においても当該重大事故等対処施設を十分に支持することができる地盤

四 特定重大事故等対処施設 設置許可基準規則第四条第二項の規定により算定する地震力が作用した場合及び基準地震動による地震力が作用した場合においても当該特定重大事故等対処施設を十分に支持することができる地盤

（地震による損傷の防止）
第五十条 重大事故等対処施設は、次に掲げる施設の区分に応じ、それぞれ次に定めるところにより施設しなければならない。

一 常設耐震重要重大事故防止設備が設置される重大事故等対処施設（特定重大事故等対処施設を除く。）基準地震動による地震力に対して重大事故に至るおそれがある事故に対処するために必要な機能が損なわれるおそれがないこと。

二 常設耐震重要重大事故防止設備以外の常設重大事故防止設備が設置される重大事故等対処施設（特定重大事故等対処施設を除く。）設置許可基準規則第四条第二項の規定により算定する地震力に十分に耐えること。

三 常設重大事故緩和設備が設置される重大事故等対処施設（特定重大事故等対処施設を除く。）基準地震動による地震力に対して重大事故に対処するために必要な機能が損なわれるおそれがないこと。

四 特定重大事故等対処施設 設置許可基準規則第四条第二項の規定により算定する地震力に十分に耐え、かつ、基準地震動による地震力に対して重大事故等に対処するために必要な機能が損なわれるおそれがないこと。

2 重大事故等対処施設（前項第二号の重大事故等対処施設を除く。）が設置許可基準規則第四条第三項の地震により生ずる斜面の崩壊によりその重大事故等に対処するために必要な機能が損なわれるおそれがないよう、防護措置その他の適切な措置を講じなければならない。（津波による損傷の防止）

第五十一条 重大事故等対処施設が基準津波によりその重大事故等に対処するために必要な機能が損なわれるおそれがないよう、防護措置その他の適切な措置を講じなければならない。

第五十二条 重大事故等対処施設が火災によりその重大事故等に対処するために必要な機能が損なわれるおそれがないよう、次に掲げる措置を講じなければならない。

一 火災の発生を防止するため、次の措置を講ずること。
 イ 発火性又は引火性の物質を内包する系統の漏えい防止その他の措置を講ずること。
 ロ 重大事故等対処施設には、不燃性材料又は難燃性材料を使用すること。ただし、次に掲げる場合は、この限りでない。

(1) 重大事故等対処施設に使用する材料が、代替材料である場合
 (2) 重大事故等対処施設の機能を確保するために必要な代替材料の使用が技術上困難な場合であつて、重大事故等対処施設における火災に起因して他の重大事故等対処施設において火災が発生することを防止するための措置が講じられている場合

ハ 避雷設備その他の自然現象による火災発生を防止するための設備を施設すること。
 ニ 水素の供給設備その他の水素が内部に存在する可能性がある設備にあつては、水素の燃焼が起きた場合においても重大事故等対処施設を損なわれないよう施設すること。

ホ 放射線分解により発生し、蓄積した水素の急速な燃焼によって、重大事故等対処施設

設の重大事故等に対処するために必要な機能を損なうおそれがある場合には、水素の蓄積を防止する措置を講ずること。
 ニ 火災の感知及び消火のため、火災と同時に発生すると想定される自然現象により、火災感知設備及び消火設備の機能が損なわれることがないように施設すること。

第五十三条 工場等には、次に定めるところにより特定重大事故等対処施設を施設しなければならない。

一 原子炉建屋への故意による大型航空機の衝突その他のテロリズムに対してその重大事故等に対処するために必要な機能が損なわれるおそれがないこと。
 ニ 原子炉格納容器の破損を防止するために必要な設備を有すること。

三 原子炉建屋への故意による大型航空機の衝突その他のテロリズムの発生後、発電用原子炉施設の外からの支援が受けられるまでの間、使用できること。

（重大事故等対処設備）
第五十四条 重大事故等対処設備は、次に定めるところによらなければならない。

一 想定される重大事故等が発生した場合における温度、放射線、荷重その他の使用条件において、重大事故等に対処するために必要な機能を有効に発揮すること。
 ニ 想定される重大事故等が発生した場合において確実に操作できること。

三 健全性及び能力を確認するため、発電用原子炉の運転中又は停止中に必要な箇所の保守点検（試験及び検査を含む。）ができること。
 四 本来の用途以外の用途として重大事故等に対処するために使用する設備にあつては、通常時に使用する系統から速やかに切り替えらるる機能を備えること。

五 工場等内の他の設備に対して悪影響を及ぼさないこと。
 六 想定される重大事故等が発生した場合において重大事故等対処設備の操作及び復旧作業を行うことができるよう、放射線量が高くなるおそれが少ない設置場所の選定、設置場所への遮蔽物の設置その他の適切な措置を講ずること。

2 常設重大事故等対処設備は、前項の規定によるほか、次に定めるところによらなければならない。

一 想定される重大事故等の収束に必要な容量を有すること。
 二 二以上の発電用原子炉施設において共用しないこと。ただし、二以上の発電用原子炉施設と共用することによって当該二以上の発電用原子炉施設の安全性が向上する場合であつて、同一の工場等内の他の発電用原子炉施設に対して悪影響を及ぼさない場合は、この限りでない。

三 常設重大事故防止設備には、共通要因（設置許可基準規則第二条第二項第十八号に規定する共通要因をいう。以下同じ。）によって設計基準事故対処設備の安全機能と同時にその機能が損なわれるおそれがないよう、適切な措置を講ずること。

3 可搬型重大事故等対処設備に関しては、第一項の規定によるほか、次に定めるところによらなければならない。

一 想定される重大事故等の収束に必要な容量に加え、十分に余裕のある容量を有すること。
 二 常設設備（発電用原子炉施設と接続されている設備又は短時間に発電用原子炉施設と接続することができる常設の設備をいう。以下同じ。）と接続するものにあつては、当該常設設備と容易かつ確実に接続することができ、かつ、二以上の系統又は発電用原子炉施設が相互に使用することができるよう、接続部の規格の統一その他の適切な措置を講ずること。

三 常設設備と接続するものにあつては、共通要因によって接続することができなくなることを防止するため、可搬型重大事故等対処設備（原子炉建屋の外から水又は電力を供給するものに限り。）の接続口をそれぞれ互いに異なる複数の場所に設けること。

四 想定される重大事故等が発生した場合において可搬型重大事故等対処設備を設置場所に据え付け、及び常設設備と接続することができるよう、放射線量が高くなるおそれが少ない設置場所の選定、設置場所への遮蔽物の設置その他の適切な措置を講ずること。

五 地震、津波その他の自然現象又は故意による大型航空機の衝突その他のテロリズムによる影響、設計基準事故対処設備及び重大事故等対処設備の配置その他の条件を考慮した上

で、耐震重要施設に属する設計基準事故対処設備が有する機能を代替するもの（以下「常設耐震重要重大事故等対処施設」という。）が設置される重大事故等対処施設（特定重大事故等対処施設を除く。）基準地震動による地震力が作用した場合においても当該重大事故等対処施設を十分に支持することができる地盤

で常設重大事故等対処設備と異なる保管場所
に保管すること。

六 想定される重大事故等が発生した場合にお
いて可搬型重大事故等対処設備を運搬し、又
は他の設備の被害状況を把握するため、工場
等内の道路及び通路が確保できるように、適切
な措置を講ずること。

七 重大事故防止設備のうち可搬型のものに
は、共通要因によって、設計基準事故対処設
備の安全機能、使用済燃料貯蔵槽の冷却機能
若しくは注水機能又は常設重大事故防止設備
の重大事故に至るおそれがある事故に対処す
るために必要な機能と同時にその機能が損な
われるおそれがないよう、適切な措置を講ず
ること。

(材料及び構造)

第五十五条 重大事故等対処設備に属する容器、
管、ポンプ若しくは弁又はこれらの支持構造物
の材料及び構造は、次に定めるところによらな
ければならない。この場合において、第一号か
ら第三号まで及び第七号の規定については、法
第四十三条の三の十一第二項に定める使用前事
業者検査の確認を行うまでの間適用する。

一 重大事故等クラス1機器及び重大事故等ク
ラス1支持構造物に使用する材料は、次に定
めるところによること。

イ 重大事故等クラス1機器又は重大事故等
クラス1支持構造物が、その使用される圧
力、温度、荷重その他の使用条件に対して
適切な機械的強度及び化学的成分を有する
こと。

ロ 重大事故等クラス1機器に使用する材料
にあつては、当該機器の最低使用温度に対
して適切な破壊じん性を有することを機械
試験その他の評価方法により確認したもの
であること。

ハ 重大事故等クラス1機器に属する鑄造品
にあつては、有害な欠陥がないことを非破
壊試験により確認したものであること。

ニ 重大事故等クラス2機器及び重大事故等ク
ラス2支持構造物に使用する材料は、次に定
めるところによること。ただし、次に掲げる
性能と同等以上の性能を有する場合は、この
限りでない。

イ 重大事故等クラス2機器又は重大事故等
クラス2支持構造物が、その使用される圧
力、温度、荷重その他の使用条件に対して

適切な機械的強度及び化学的成分を有する
こと。

ロ 重大事故等クラス2機器に使用する材料
にあつては、当該機器の最低使用温度に対
して適切な破壊じん性を有することを機械
試験その他の評価方法により確認したもの
であること。

ハ 重大事故等クラス2機器に属する鑄造品
にあつては、有害な欠陥がないことを非破
壊試験により確認したものであること。

三 重大事故等クラス3機器(重大事故等ク
ラス3容器、重大事故等クラス3管、重大事故
等クラス3ポンプ又は重大事故等クラス3弁
をいう。以下同じ。)に使用する材料は、当
該機器が使用される圧力、温度、荷重その他
の使用条件に対して適切な機械的強度及び化
学的成分を有すること。

四 重大事故等クラス1機器及び重大事故等ク
ラス1支持構造物の構造及び強度は、次に定
めるところによること。ただし、想定される
重大事故等に対処するために必要な構造及び
強度を有するものについては、この限りでな
い。

イ 重大事故等クラス1機器にあつては、設
計上定める条件において、全体的な変形を
弾性域に抑えること。

ロ 重大事故等クラス1機器に属する伸縮継
手に戻しては、設計上定める条件で応力が
繰り返し加わる場合において、疲労破壊が
生じないこと。

ハ 重大事故等クラス1管(伸縮継手を除
く。)にあつては、設計上定める条件にお
いて、疲労破壊が生じないこと。

ニ 重大事故等クラス1容器及び重大事故等
クラス1管にあつては、設計上定める条件
において、座屈が生じないこと。

ホ 重大事故等クラス1支持構造物であつ
て、重大事故等クラス1機器に溶接により
取り付けられ、その損壊により重大事故等
クラス1機器に損壊を生じさせるおそれが
あるものにあつては、設計上定める条件に
おいて、延性破断及び座屈が生じないこ
と。

五 重大事故等クラス2機器及び重大事故等ク
ラス2支持構造物の構造及び強度は、次に定
めるところによること。ただし、次に掲げる
性能と同等以上の性能を有する場合は、この
限りでない。

イ 重大事故等クラス2機器にあつては、設
計上定める条件において、全体的な変形を
弾性域に抑えること。

ロ 重大事故等クラス2機器に属する伸縮継
手にあつては、設計上定める条件で応力が
繰り返し加わる場合において、疲労破壊が
生じないこと。

ハ 重大事故等クラス2管(伸縮継手を除
く。)にあつては、設計上定める条件にお
いて、疲労破壊が生じないこと。

ニ 重大事故等クラス2容器及び重大事故等
クラス2管にあつては、設計上定める条件
において、座屈が生じないこと。

ホ 重大事故等クラス2支持構造物であつ
て、重大事故等クラス2機器に溶接により
取り付けられ、その損壊により重大事故等
クラス2機器に損壊を生じさせるおそれが
あるものにあつては、設計上定める条件に
おいて、延性破断及び座屈が生じないこ
と。

六 重大事故等クラス3機器の構造及び強度
は、設計上定める条件において、全体的な変
形を弾性域に抑えること。

七 重大事故等クラス1容器、重大事故等ク
ラス1管、重大事故等クラス2容器及び重大事
故等クラス2管のうち主要な耐圧部の溶接部
(溶接金属部及び熱影響部をいう。)は次に定
めるところによること。ただし、重大事故等
クラス2容器及び重大事故等クラス2管にあ
つては、次に掲げる性能と同等以上の性能を
有する場合は、この限りでない。

イ 不連続で特異な形状でないものであるこ
と。

ロ 溶接による割れが生ずるおそれがなく、
かつ、健全な溶接部の確保に有害な溶込み
不良その他の欠陥がないことを非破壊試験
により確認したものであること。

ハ 適切な強度を有するものであること。
ニ 機械試験その他の評価方法により適切な
溶接施工法、溶接設備及び技能を有する溶
接士であることをあらかじめ確認したもの
により溶接したものであること。

(使用中の亀裂等による破壊の防止)
第五十六条 使用中の重大事故等クラス1機器
、重大事故等クラス2機器及び重大事故等ク
ラス2機器及び重大事故等クラス2支持構造物
には、その破壊を引き起こす亀裂その他の欠陥
があつてはならない。

(安全弁等)
第五十七条 重大事故等対処施設には、発電用原
子炉施設の安全性を確保する上で機器に作用す
る圧力の過度の上昇を適切に防止する性能を有
する安全弁、逃がし弁、破壊板又は真空破壊弁
を必要箇所に設けなければならない。

(耐圧試験等)
第五十八条 重大事故等クラス1機器、重大事故
等クラス2機器及び重大事故等クラス3機器に
属する機器は、当該機器の使用時における圧力
で耐圧試験を行ったとき、これに耐え、かつ、
著しい漏えいがないものでなければならぬ。か
つ、圧力を加えた場合に著しい漏えいがないこ
とを確認できる場合は、この限りでない。

2 重大事故等クラス1機器、重大事故等クラス
2機器及び重大事故等クラス3機器に属する機
器は、当該機器の使用時における圧力で漏えい
試験を行ったとき、著しい漏えいがないもので
なければならぬ。ただし、他の方法により当
該圧力を加えた場合に著しい漏えいがないこ
とを確認できる場合は、この限りでない。
(緊急停止失敗時に発電用原子炉を未臨界にす
るための設備)
第五十九条 発電用原子炉施設には、運転時の異
常な過渡変化時において発電用原子炉の運転を
緊急に停止することができない事象が発生する
おそれがある場合又は当該事象が発生した場合
において炉心の著しい損傷を防止するため、
原子炉冷却材圧力バウンダリ及び原子炉格納容
器の健全性を維持するとともに、発電用原子炉
を未臨界に移行するために必要な設備を施設し
なければならない。

(原子炉冷却材圧力バウンダリ高圧時に発電用
原子炉を冷却するための設備)
第六十条 発電用原子炉施設には、原子炉冷却材
圧力バウンダリが高圧の状態であつて、設計基
準事故対処設備が有する発電用原子炉の冷却機
能が喪失した場合においても炉心の著しい損傷
を防止するため、発電用原子炉を冷却するため
に必要な設備を施設しなければならない。
(原子炉冷却材圧力バウンダリを減圧するため
の設備)
第六十一条 発電用原子炉施設には、原子炉冷却
材圧力バウンダリが高圧の状態であつて、設計
基準事故対処設備が有する発電用原子炉の減圧
機能が喪失した場合においても炉心の著しい損

傷及び原子炉格納容器の破損を防止するため、原子炉冷却材圧力バウンダリを減圧するため必要な設備を施設しなければならない。

(原子炉冷却材圧力バウンダリ低圧時に発電用原子炉を冷却するための設備)

第六十二条 発電用原子炉施設には、原子炉冷却材圧力バウンダリが低圧の状態であつて、設計基準事故対処設備が有する発電用原子炉の冷却機能が喪失した場合においても炉心の著しい損傷及び原子炉格納容器の破損を防止するため、発電用原子炉を冷却するために必要な設備を施設しなければならない。

(最終ヒートシンクへ熱を輸送するための設備)

第六十三条 発電用原子炉施設には、設計基準事故対処設備が有する最終ヒートシンクへ熱を輸送する機能が喪失した場合において炉心の著しい損傷及び原子炉格納容器の破損(炉心の著しい損傷が発生する前に生ずるものに限る。)を防止するため、最終ヒートシンクへ熱を輸送するために必要な設備を施設しなければならない。

(原子炉格納容器内の冷却等のための設備)

第六十四条 発電用原子炉施設には、設計基準事故対処設備が有する原子炉格納容器内の冷却機能が喪失した場合において炉心の著しい損傷を防止するため、原子炉格納容器内の圧力及び温度を低下させるために必要な設備を施設しなければならない。

2 発電用原子炉施設には、炉心の著しい損傷が発生した場合において原子炉格納容器の破損を防止するため、原子炉格納容器内の圧力及び温度並びに放射性物質の濃度を低下させるために必要な設備を施設しなければならない。

(原子炉格納容器の過圧破損を防止するための設備)

第六十五条 発電用原子炉施設には、炉心の著しい損傷が発生した場合において原子炉格納容器の過圧による破損を防止するため、原子炉格納容器バウンダリ(設置許可基準規則第二条第二項第三十七号に規定する原子炉格納容器バウンダリをいう。)を維持しながら原子炉格納容器内の圧力及び温度を低下させるために必要な設備を施設しなければならない。

2 発電用原子炉施設(原子炉格納容器の構造上、炉心の著しい損傷が発生した場合において短時間のうちに原子炉格納容器の過圧による破損が発生するおそれがあるものに限る。)には、

前項の設備に加えて、原子炉格納容器内の圧力を大気中に逃がすために必要な設備を施設しなければならない。

3 前項の設備は、共通要因によつて第一項の設備の過圧破損防止機能(炉心の著しい損傷が発生した場合において原子炉格納容器の過圧による破損を防止するために必要な機能をいう。)と同時にその機能が損なわれるおそれがないよう、適切な措置を講じたものでなければならぬ。

(原子炉格納容器下部の溶融炉心を冷却するための設備)

第六十六条 発電用原子炉施設には、炉心の著しい損傷が発生した場合において原子炉格納容器の破損を防止するため、溶融し、原子炉格納容器の下部に落下した炉心を冷却するために必要な設備を施設しなければならない。

(水素爆発による原子炉格納容器の破損を防止するための設備)

第六十七条 発電用原子炉施設には、炉心の著しい損傷が発生した場合において原子炉格納容器内における水素による爆発(以下「水素爆発」という。)による破損を防止する必要がある場合には、水素爆発による原子炉格納容器の破損を防止するために必要な設備を施設しなければならない。

(水素爆発による原子炉建屋等の損傷を防止するための設備)

第六十八条 発電用原子炉施設には、炉心の著しい損傷が発生した場合において原子炉建屋その他の原子炉格納容器から漏えいする気体状の放射性物質を格納するための施設(以下「原子炉建屋等」という。)の水素爆発による損傷を防止する必要がある場合には、水素爆発による当該原子炉建屋等の損傷を防止するために必要な設備を施設しなければならない。

(使用済燃料貯蔵槽の冷却等のための設備)

第六十九条 発電用原子炉施設には、使用済燃料貯蔵槽の冷却機能又は注水機能が喪失し、又は使用済燃料貯蔵槽からの水の漏えいその他の要因により当該使用済燃料貯蔵槽内の水位が低下した場合において使用済燃料貯蔵槽内の燃料体又は使用済燃料(以下「貯蔵槽内燃料体等」という。)を冷却し、放射線を遮蔽し、及び臨界を防止するために必要な設備を施設しなければならない。

使用済燃料貯蔵槽の水位が異常に低下した場合において貯蔵槽内燃料体等の著しい損傷の進行を緩和し、及び臨界を防止するために必要な設備を施設しなければならない。

(工場等外への放射性物質の拡散を抑制するための設備)

第七十条 発電用原子炉施設には、炉心の著しい損傷及び原子炉格納容器の破損又は貯蔵槽内燃料体等の著しい損傷に至つた場合において工場等外への放射性物質の拡散を抑制するために必要な設備を施設しなければならない。

(重大事故等の収束に必要な水の供給設備)

第七十一条 設計基準事故の収束に必要な水源とは別に、重大事故等の収束に必要となる十分な量の水を有する水源を確保することに加えて、発電用原子炉施設には、設計基準事故対処設備及び重大事故等対処設備に対して重大事故等の収束に必要な量の水を供給するために必要な設備を施設しなければならない。

(電源設備)

第七十二条 発電用原子炉施設には、設計基準事故対処設備の電源が喪失したことにより重大事故等が発生した場合において炉心の著しい損傷、原子炉格納容器の破損、貯蔵槽内燃料体等の著しい損傷及び運転停止中における発電用原子炉内の燃料体(以下「運転停止中炉内燃料体」という。)の著しい損傷を防止するために必要な電力を確保するために必要な設備を施設しなければならない。

2 発電用原子炉施設には、第四十五条第一項の規定により設置される非常用電源設備及び前項の規定により設置される電源設備のほか、設計基準事故対処設備の電源が喪失したことにより重大事故等が発生した場合において炉心の著しい損傷、原子炉格納容器の破損、貯蔵槽内燃料体等の著しい損傷及び運転停止中炉内燃料体の著しい損傷を防止するための常設の直流電源設備を施設しなければならない。

(計装設備)

第七十三条 発電用原子炉施設には、重大事故等が発生し、計測機器(非常用のものを含む。)の故障により当該重大事故等に対処するために監視することが必要なパラメータ(設置許可基準規則第十六条第三項第二号に規定するパラメータをいう。)を計測することが困難となつた場合において当該パラメータを推定するために有効な情報を把握できる設備を施設しなければならない。

(運転員が原子炉制御室にとどまるための設備)

第七十四条 発電用原子炉施設には、炉心の著しい損傷が発生した場合(重大事故等対処設備(特定重大事故等対処設備を構成するものを除く。)が有する原子炉格納容器の破損を防止するための機能が損なわれた場合を除く。)においても運転員が第三十八条第一項の規定により設置される原子炉制御室にとどまるために必要な設備を施設しなければならない。

(監視測定設備)

第七十五条 発電用原子炉施設には、重大事故等が発生した場合に工場等及びその周辺(工場等の周辺海域を含む。)において発電用原子炉施設から放出される放射性物質の濃度及び放射線量を監視し、及び測定し、並びにその結果を記録することができる設備を施設しなければならない。

2 発電用原子炉施設には、重大事故等が発生した場合に工場等において風向、風速その他の気象条件を測定し、及びその結果を記録することができる設備を施設しなければならない。

(緊急時対策所)

第七十六条 第四十六条の規定により設置される緊急時対策所は、重大事故等が発生した場合においても当該重大事故等に対処するための適切な措置が講じられるよう、次に定めるところによりなければならない。

一 重大事故等に対処するために必要な指示を行う要員がとどまることができるよう、適切な措置を講ずること。

二 重大事故等に対処するために必要な指示ができるよう、重大事故等に対処するために必要な情報を把握できる設備を設けること。

三 発電用原子炉施設の内外の通信連絡をする必要のある場所と通信連絡を行うために必要な設備を設けること。

緊急時対策所には、重大事故等に対処するために必要な数の要員を収容することができる措置を講じなければならない。

(通信連絡を行うために必要な設備)

第七十七条 発電用原子炉施設には、重大事故等が発生した場合において当該発電用原子炉施設の内外の通信連絡をする必要のある場所と通信連絡を行うために必要な設備を施設しなければならない。

(準用)

第七十八条 発電用火気設備に関する技術基準を定める省令第十九条から第二十三条までの規定

は、重大事故等対処施設に施設するガスタービンについて、同令第二十五条から第二十九条までの規定は、重大事故等対処施設に施設する内燃機関について準用する。

2 原子力発電用工作物に係る電気設備に関する技術基準を定める命令第四条から第十六条まで、第十九条から第二十八条まで及び第三十条から第三十五条までの規定は、重大事故等対処施設に施設する電気設備について準用する。

第四章 雑則

(電磁的記録媒体による手続)

第七十九条 第三条第二項の申請書の提出については、当該申請書の提出に代えて、当該申請書に記載すべきこととされている事項を記録した電磁的記録媒体(電磁的記録(電子的方法、磁気的方法その他の人の知覚によつて認識することができない方法で作られる記録であつて、電子計算機による情報処理の用に供されるものをいう。))に係る記録媒体をいう。以下同じ。及び別記様式の電磁的記録媒体提出票を提出することにより行うことができる。

附則

1 この規則は、原子力規制委員会設置法(平成二十四年法律第四十七号。以下「設置法」という。)附則第一条第四号に掲げる規定の施行の日(平成二十五年七月八日)から施行する。

2 この規則の施行の際現に発電用原子力設備に関する技術基準を定める省令(昭和四十年通商産業省令第六十二号)第三条第一項の規定によりされている認可は、第三条第一項の規定によりされた認可とみなす。

3 この規則の施行の際現に発電用原子力設備に関する技術基準を定める省令第三条第二項の規定による認可については、申請は、第三条第二項の規定による認可についてはされた申請とみなす。

4 実用発電用原子炉及びその附属施設的位置、構造及び設備の基準に関する規則等の一部を改正する規則(平成二十八年原子力規制委員会規則第一号)の施行の際現に設置され又は設置に着手されている発電用原子炉施設については、平成二十五年七月八日以後最初に行われる法第四十三条の三の九第一項の規定による認可(第十一号)及び第十二号並びに第三章の規定に適合するために必要な事項に係るものに限る。の)の日から起算して五年を経過する日までの間は、第五十三条及び第七十二条第二項の規定は、適

用しない。ただし、当該期間中に行われる第五十三条及び第七十二条第二項の規定に適合するために必要な事項に係る法第四十三条の三の九第一項の規定による認可及び当該認可を受けた工事の計画に従つて行われる工事に係る法第四十三条の三の十一第三項の規定による確認並びに当該確認を受けた発電用原子炉施設については、この限りでない。

附則(平成二八年一月二二日原子力規制委員会規則第一号)

この規則は、公布の日から施行する。

附則(平成二八年一〇月二四日原子力規制委員会規則第一号)

この規則は、公布の日から施行する。

附則(平成二九年五月一日原子力規制委員会規則第六号)抄

(施行期日) 第一条 この規則は、公布の日から施行する。

第二條 (経過措置)

この規則の施行の際現に設置され又は設置に着手されている発電用原子炉施設(核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律(以下「法」という。)第四十三条の三の五第二項第五号に規定する発電用原子炉施設をいう。以下同じ。))については、平成三十二年五月一日以後最初に当該発電用原子炉施設に係る法第四十三条の三の十六第一項の検査を終了した日又は平成三十二年五月一日以後に発電用原子炉(法第二十五条第五項に規定する発電用原子炉をいう。)の運転を開始する日の前日(以下「経過措置期間」という。)は、なお従前の例による。ただし、次に掲げるものについては、この限りでない。

一 経過措置期間中に行われる次に掲げる許可、認可及び確認

イ 法第四十三条の三の八第一項の規定による変更の許可(この規則による改正後の実用発電用原子炉及びその附属施設的位置、構造及び設備の基準に関する規則第二十六条第三項及び第三十四条第二項又はこの規則による改正後の研究開発段階発電用原子炉及びその附属施設的位置、構造及び設備の基準に関する規則第二十六条第三項及び第三十四条第二項の規定に適合するために必要な事項に係るものに限る。)

ロ 法第四十三条の三の九第一項の規定による認可(この規則による改正後の実用発電用

原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則第三十八条第五項及び第四十六条第二項又はこの規則による改正後の研究開発段階発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則第三十七条第五項及び第四十五条第二項の規定に適合するために必要な事項に係るものに限る。)

法第四十三条の三の十一第三項の確認

(口の認可を受けた工事の計画に従つて行われる工事に係るものに限る。)

前号ハの確認を受けた発電用原子炉施設

附則(平成二九年八月八日原子力規制委員会規則第二号)

(施行期日)

第一条 この規則は、公布の日から施行する。

第二條 (経過措置)

この規則の施行の際現に設置され又は設置に着手されている再処理施設(核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律(以下「法」という。)第四十四条第二項第二号に規定する再処理施設をいう。以下同じ。))に対する第一条の規定による改正後の再処理施設の設計及び工事の方法の技術基準に関する規則(以下「新再処理設計規則」という。)第十九条第三項(非常用発電機に接続される電気盤に関する措置に係る部分を除く。以下この項において同じ。))及び第一条の規定による改正後の再処理施設の性能に係る技術基準に関する規則(以下「新再処理性能規則」という。)第二十八条第三項(非常用発電機に接続される電気盤に関する措置に係る部分を除く。以下この項において同じ。))の規定の適用については、平成三十一年八月一日以後最初に当該再処理施設に係る法第四十六条の二の三第一項の検査を終了した日又は平成三十一年八月一日以後に再処理(法第二十条第十項に規定する再処理をいう。次項において同じ。))の事業を開始する日の前日(以下「経過措置期間」という。))は、なお従前の例による。ただし、次に掲げるものについては、この限りでない。

一 経過措置期間中に行われる次に掲げる認可及び検査

イ 法第四十五条第一項の規定による認可

(新再処理設計規則第十九条第三項に適合するために必要な事項に係るものに限る。次項において同じ。)

二 前号ロの検査に合格した再処理施設

この規則の施行の際現に設置され又は設置に着手されている再処理施設に対する新再処理設計規則第十九条第三項(非常用発電機に接続される電気盤に関する措置に係る部分に限る。)

及び新再処理性能規則第二十八条第三項(非常用発電機に接続される電気盤に関する措置に係る部分に限る。))の規定の適用については、平成三十三年八月一日以後最初に当該再処理施設に係る法第四十六条の二の三第一項の検査を終了した日又は平成三十三年八月一日以後に再処理の事業を開始する日の前日(以下「経過措置期間」という。))は、なお従前の例による。ただし、次に掲げるものについては、この限りでない。

一 経過措置期間中に行われる次に掲げる認可及び検査

イ 法第四十五条第一項の規定による認可

ロ 法第四十六条第一項の検査

二 前号ロの検査に合格した再処理施設

この規則の施行の際現に設置され又は設置に着手されている発電用原子炉施設(法第四十三条の三の五第二項第五号に規定する発電用原子炉施設をいう。以下同じ。))に対する第一条の規定による改正後の実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則(以下「新実用炉規則」という。)第四十五条第三項(非常用発電機に接続される電気盤に関する措置に係る部分を除く。以下この項において同じ。))及び第一条の規定による改正後の研究開発段階発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則(以下「新研開炉規則」という。))第四十四条第三項(非常用発電機に接続される電気盤に関する措置に係る部分を除く。以下この項において同じ。))の規定の適用については、平成三十一年八月一日以後最初に当該発電用原子炉施設に係る法第四十三条の三の十六第一項の検査を終了した日又は平成三十一年八月一日以後に発電用原子炉(法第二十五条第五項に規定する発電用原子炉をいう。次項において同じ。))の運転を開始する日の前日(以下「経過措置期間」という。))は、なお従前の例による。ただし、次に掲げるものについては、この限りでない。

一 経過措置期間中に行われる次に掲げる認可及び確認

イ 法第四十三条の三の九第一項の規定による認可

(この規則による改正後の実用発電用

十七条第一項及び第四十三條の三の九第一項の規定に該当するものを行つてゐる者は、この規則の施行後においても引き続きその工事を行うことができる。

附則（平成三〇年六月八日原子力規制委員会規則第六号）
この規則は、公布の日から施行する。

附則（平成三一年四月二日原子力規制委員会規則第四号）
この規則は、公布の日から施行する。

附則（令和元年七月一日原子力規制委員会規則第三号）
この規則は、不正競争防止法等の一部を改正する法律の施行の日（令和元年七月一日）から施行する。ただし、第四十四條の規定は、放射性同位元素等による放射線障害の防止に関する法律施行規則の一部を改正する規則（平成三十年原子力規制委員会規則第十一号）の施行の日（令和元年九月一日）から施行する。

附則（令和二年一月二三日原子力規制委員会規則第三号）抄
（施行期日）
第一条 この規則は、原子力利用における安全対策の強化のための核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律等の一部を改正する法律（平成二十九年法律第十五号）第三條の規定の施行の日（令和二年四月一日）から施行する。

第三条 この規則の施行の際現に設置されている発電用原子炉施設（核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律施行令（昭和三十三年政令第三百二十四号）第一条に規定する研究開発段階発電用原子炉（以下単に「研究開発段階発電用原子炉」という。）に係るものを除く。以下同じ。）（旧法第四十三條の三の三十四第二項の廃止措置計画の認可を受けているもの及び旧法第四十三條の三の十五の施設定期検査（以下「施設定期検査」という。）を受けたことがないものを除く。）であつて、旧法第四十三條の三の十一第一項の規定による使用前検査（実用発電用原子炉及びその附属施設の技術基準に関する規則第十一条及び第十二条並びに第三章の規定に係るものに限る。）に合格してゐるものについて、この規則の施行後最初に行うべき新法第四十三條の三の十六第一項の検査は、直近の施設定期検査が終了した日以降十三

月を超えない時期に行うものとする。ただし、第三項に該当する場合はこの限りでない。
2 この規則の施行の際現に設置されている発電用原子炉施設であつて、旧法第四十三條の三の三十四第二項の廃止措置計画の認可を受けているものについて、この規則の施行後最初に行うべき新法第四十三條の三の十六第一項の検査は、次の各号に掲げる区分に応じ、それぞれ当該各号に定める時期に行うものとする。ただし、次項に該当する場合はこの限りでない。
一 旧実用炉規則第四十九條第一項の規定に該当しない発電用原子炉 直近の施設定期検査が終了した日以降十三月を超えない時期
二 旧実用炉規則第四十九條第一項の規定に該当する発電用原子炉 施行日から十三月を超えない時期
3 施行日の前日において施設定期検査を受けている発電用原子炉施設については、この規則の施行後最初に行うべき新法第四十三條の三の十六第一項の検査は、施行後直ちに行うものとする。

第四条 施行日から令和二年四月三十日までの間に新法第四十三條の三の十六第一項の検査を開始しようとする者（研究開発段階発電用原子炉に係るものを除く。次項において同じ。）に係る新実用炉規則第五七條の三第二項の規定の適用については、同項中「検査開始予定日の一月前まで（第五十六條第二項の一定の期間（以下この条において単に「一定の期間」という。）を定め、又は変更（一定の期間を短縮する場合を除く。）をした場合は三月前まで）」とあるのは、「この規則の施行の日まで」とする。
2 施行日から令和二年四月三日までの間に新法第四十三條の三の十六第一項の検査を開始しようとする者に係る新実用炉規則第五七條の三第二項の規定の適用については、同項中「原子炉の起動予定日の三日前」とあるのは、「この規則の施行の日」とする。
3 前条第三項の規定に基づき施行後直ちに行う検査については、新実用炉規則第五七條の三第二項の規定（同条第一項第一号に掲げるときに係るものに限る。）は、適用しない。

第五条 施行日前に旧法第四十三條の三の二十一の規定により記録した旧実用炉規則第六十七條の表の上欄に掲げる事項の保存については、なお従前の例による。この場合において、同表第一号イ中「次の検査」とあるのは、「この規則の施行後最初の使用前確認」と、同号ロ中「次の検査」とあるのは、「この規則の施行後最初の定期事業者検査」と読み替へるものとする。

第六條 この規則の施行の際現に発電用原子炉施設の設置の工事に着手している者又は旧法第四十三條の三の二十四第一項の規定により保安規定の認可を受けている者（研究開発段階発電用原子炉に係るものを除く。）は、令和二年九月三十日までに新法第四十三條の三の二十四第一項に規定する保安規定の認可又は変更の認可を申請しなければならない。
2 前項の規定による保安規定の認可又は変更の認可を申請した者が講ずる保安のために必要な措置については、当該申請に係る認可又は認可の拒否の処分があつた日までの間は、新実用炉規則第六十九條から第九十條までの規定にかかわらず、なお従前の例による。
第七條 この規則の施行の際現に旧法第四十三條の三の三十四第二項の規定による認可を受けている者（研究開発段階発電用原子炉に係るものを除く。）は、令和二年九月三十日までに新法第四十三條の三の三十四第三項において読み替へて準用する新法第十二條の六第三項に規定する廃止措置計画の変更の認可（新実用炉規則第六十六條第一項第六号、第七号及び第十二号並びに第二項第六号及び第九号に掲げる事項に係るものに限る。）を申請しなければならない。
2 前項の規定による廃止措置計画の変更の認可を申請した者に係る廃止措置については、当該申請に係る認可又は認可の拒否の処分があつた日までの間は、新実用炉規則第六十六條第一項第六号、第七号及び第十二号並びに第二項第六号及び第九号の規定にかかわらず、なお従前の例による。

第十五條 この附則において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。
一 旧法 原子力利用における安全対策の強化のための核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律等の一部を改正する法律第三條の規定による改正前の核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律をいう。
二 新法 原子力利用における安全対策の強化のための核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律等の一部を改正する法律をいう。
三 旧実用炉規則 この規則による改正前の実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則をいう。
四 新実用炉規則 この規則による改正後の実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則をいう。
五 施行日 この規則の施行の日をいう。

の規制に関する法律等の一部を改正する法律第三條の規定による改正後の核原料物質、核燃料物質及び原子炉の規制に関する法律をいう。
三 旧実用炉規則 この規則による改正前の実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則をいう。
四 新実用炉規則 この規則による改正後の実用発電用原子炉の設置、運転等に関する規則をいう。
五 施行日 この規則の施行の日をいう。

別記様式（第3号様式） 電磁的記録複製等取扱い票

申 請 印

電子庁情報委員会 様
住 所
〒 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
電 話 〇〇〇〇 〇〇〇〇-〇〇〇〇
電 子 庁 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
国 際 法 院 〇〇〇 〇〇〇 〇〇〇
（印）
本申請書は申請者（以下「申請者」といいます。）が、その所属機関の所管の業務に関する情報の複製等取扱いの取扱いに
よる機密情報の漏洩を防止するため、本申請書に記載された事項を記録した電磁的記録複製等取
扱い票を作成し提出いたします。
申請書に記載されている電磁的記録複製等取扱いの事項は、事前に承認済み事項は、

- 1 電磁的記録複製等取扱いの事項
- 2 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項

欄①： 申請の内容及び、必要な取扱いの承認済事項を記載すること。

- ① 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項、申請書に記載されている事項を記載すること。
- ② 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項を記載すること。
- ③ 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項を記載すること。
- ④ 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項を記載すること。

欄②： 申請の内容及び、必要な取扱いの承認済事項を記載すること。

- 1 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項を記載すること。
- 2 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項を記載すること。
- 3 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項を記載すること。
- 4 電磁的記録複製等取扱いの承認済事項を記載すること。